七人の墓友

脚本・演出　鈴木聡

登場人物

吉野仁美（吉野家の長女）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・岩橋道子
吉野邦子（仁美の母）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・弘中麻紀
吉野義男（仁美の父）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・俵木藤汰
吉野義和（吉野家の長男）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・宇納佑
吉野美枝子（義和の妻）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ともさと衣
吉野義明（吉野家の次男）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・中野順一朗
松坂照之（義明のパートナー）・・・・・・・・・・・・・・・・・浦川拓海

栗原誠二（義男の友人）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・おかやまはじめ

高沢遥香（仁美の友人）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・桜一花
京本剛（遥香の元カレ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・林大樹
中島聖子（ウエイトレス・剛の現恋人）・・・・・・・・・・・・・磯部莉菜子

三村正明（編集長・仁美の恋人）・・・・・・・・・・・・・・・・熊川隆一

木島佐和子（邦子の墓友）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・松村武
多田陽子（邦子の墓友）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・谷川清美
松岡由利江（邦子の墓友）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・大草理乙子
岡添祥文（邦子の墓友）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・武藤直樹
竹内弘（邦子の墓友）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・岩本淳

松坂浩介（住職）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・木村靖司

【1場／スカイツリー】

音楽。明かり入る。仁美が話す。
平日の昼間、仕事を中断して来た服装。

仁美　夏が始まったある日、私は実家の母に、スカイツリーの展望台に呼び出された。

そこは展望デッキ。邦子が景色を見ながら。

邦子　高いわね。
仁美　高いわよ。高いのが売り物だもの。
邦子　あんまりきれいじゃないわね。ちっちゃなうちがごちゃごちゃしてる。
仁美　隅田川は気持ちいいじゃない。浅草寺が見えるわよ。
邦子　あのおうちの一軒一軒で、一人一人が、死んでゆくのね。
仁美　ふつう「生きてるのね」って言わない？なんかあった？
邦子　桃太郎が死んだのよ。
仁美　え？
邦子　犬よ、うちの。
仁美　ああ、あの汚い柴犬？
邦子　あたしとお父さんは可愛がってたのよ。
仁美　あたしはぜんぜん思い入れない。うち出てからお母さんが飼った犬だもん。子供のころ飼ってたチャッピーは好きだったけど。
邦子　チャッピーは虫歯が多かったわよ。あんたたちが駄菓子ばかり食べさせるから。
仁美　よっちゃんいかが好きだったのよ。いくつだったの桃太郎。
邦子　17歳。
仁美　それ、犬としてはずいぶん長生きなんじゃない？
邦子　人間で言えば百歳ぐらいよ。枯れた味があったわね。笠智衆って俳優に似てた。……あたしもそろそろね。
仁美　笠智衆に似てくるのが？
邦子　ちがうわよ。桃太郎みたいに、こんなちっちゃくなっちゃうのが。
仁美　だいじょぶよお母さんは。だってまだ70でしょう？

邦子　69よ。
仁美　平均寿命で言えばあと十五年か二十年はあるわよ。
邦子　十五年でも二十年でもあっと言う間よ。あんたいくつよ、十五年前。
仁美　27。
邦子　この十五年、あっという間だったでしょ？
仁美　あっという間。結婚して子供産んで、エッセイの本の二、三冊も出してる予定だったけど、どれもしてないし。
邦子　この先はもっとあっという間よ。
仁美　69まであっという間？
邦子　そう。
仁美　69から平均寿命まであっという間？
邦子　そう。
仁美　じゃあたしもそろそろじゃない。
邦子　だからね、お墓どうしようかと思って。
仁美　お墓は岡山にあるでしょう、お父さんの実家のが。お母さんもあそこ入るんじゃないの？
邦子　あんなとこ遠すぎるわよ。あんたお墓詣りこないでしょ。
仁美　そりゃね、一年にいっぺん行けるかいけないか、
邦子　それにあのあたりは、八ツ墓村のモデルになった村の隣なのよ。怖いじゃない、「たたりじゃー」なんて言っておばけがでてきたら。
仁美　だいじょぶよ。その時はもうお母さんもおばけだから。
邦子　ともかくね、どうしようかと思ってんのよ。それあんたに聞いてもらおうと思って。じゃごはんいきましょうか。フロアマップがあるのよ。何食べようかしらねえ……。
仁美　え？ちょっと。話ってそれだけ？
邦子　そうよ。
仁美　こんな話のために、わざわざスカイツリーに呼び出したの？。
邦子　こういう話するのはね、天国にちかいとこがいいと思ったのよ。
仁美　……。

音楽。邦子、フロアマップを見ながら去る。
明かりがいったん仁美に絞られ、２場につづく。

【2場／吉野家の庭】

吉野家の庭。夏の白昼。

仁美　お盆の前の週の土曜日は実家の庭でバーベキュー大会。年に一度の父の楽しみだ。高井戸から兄が奥さんを連れてきて、ニューヨークからは弟が友達を連れてやってきた。

栗原がビールの入った紙コップとバーベキューの串を持って現れる。

仁美　栗原のおじさんは父の友人だが母の友人でもある。鉄鋼会社の新入社員時代父と母を取り合ったのだという。父と母はそれを否定する。この人はウケそうなことはなんでも言うので、嘘かもしれない。

栗原　仁美ちゃん、

仁美　はい。

栗原　人生の五つの真実って話があってね、

仁美　また嘘でしょ。

栗原　一、人は自分の舌で自分のすべての歯にさわることはできない。二、あなたは今それを実行している。三、これは真っ赤なウソである。四、あなたはいま恥ずかしい。

仁美、二つの紙コップを手にグリル台のほうからやってきた義明に。

仁美　ねえ、義明。

栗原　五、いまあなたは誰かに試そうとしている。

仁美　おじさんすごい、ぜんぶ当たった。

義明　ねえさん何？（紙コップを差し出す）

仁美　（受け取りながら）一、自分の舌で自分のすべての歯にはさわれないのよ。

義明　そんなことないよ、さわれるよ。

仁美　失敗した。

栗原　芸術家は手ごわいね。

義明　え、なに、なに。
栗原　義明君、久しぶり。
義明　お久しぶりです。
栗原　去年のバーベキューには来なかったから二年ぶりかな。
義明　去年の夏はちょうど個展をやってたんですよ。
仁美　どんな個展？
義明　セントラルパークから2ブロック離れた空き地に、いろんな形の便器を76個集めて並べたんだ。それぞれの便器にはちょっとずつ色をつけて。つまり、排便後のシミみたいに。
栗原　それ芸術なの？
仁美　ＮＹではなんでもありってことね。
義明　たぶんあの街はそれでバランスを取ってるんだ。かたやウォール街があって、そこは数字が多いか少ないかがすべての世界だ。それに対抗するように、数字では表現できない、モラルやルールからはみ出すものがどんどん膨れ上がる。だから芸術家は日本より尊敬されてるよ。僕みたいにまだ無名でも役割を認めて大事にしてくれる。
仁美　あんた昔よりお喋りになったわね。
義明　むこうにいるとこうなっちゃうよ。自己主張の街だからね。
栗原　日本もだんだんそうなってるよ。女房の自己主張がすごいんだ。こないだも一緒に寿司屋へ行ったんだが、トロ！トロ！ってそればっかり主張しやがって。
仁美　それはただ食べたかったのよ。

照之が登場。手に紙コップとバーベキューの紙皿。

照之　ＡＫＩ。
義明　Ｈｉ、ＴＥＲＵ！　Ｙｏｕ　ｅｎｊｏｙ？
照之　Ｙｅａｈ、とってもね。
仁美　どうですか、うちのバーベキュー。
照之　おいしいですよ、肉がやわらかくて。お父さんの焼き方も上手だし。
栗原　あいつの自慢なんだよ。若いころ会社のリクレーション大会で焼き方を上司に褒められたんだ。ハハ。
仁美　テルさんはどんな作品を作ってるの？
照之　僕は絵描きなんですよ。いわゆるストリートアートっていうか。
仁美　ああ、キース・ヘリング。

照之　ええ、もうちょっと写実的だけど、街をキャンバスにするっていうことでは同じかな。
栗原　どうなんだい、芸術の仲間として義明君は。売れそうかい？
照之　すぐってわけじゃないけど、二、三年のうちには必ず売れると思いますよ。トイレの個展も評判良かったし。コンセプチュアルアートとしては本流です。Ｏｌｄｆａｓｈｏｎｅｄとか、Ｓｔｅｒｅｏｔｙｐｅｄとか、そういう批評も出たけど、僕に言わせればＦｕｃｋｉｎｇですね。アキの作品には叡智があります。人生に対する深い洞察があるんですね。僕は好きですね。アキの作品に触れると人間が愛おしく思えてくるんです。
義明　ありがとう。僕も好きだよ、テルのアートが。
照之　Ｍｙ　ｐｌｅａｓｕｒｅ．（どういたしまして）

義明は照之の手を取り、これ以降、二人はさりげなく時折手を触れ合うのである。

仁美　いい感じじゃない、夢のある若者同士が支え合ってて。
栗原　だけどもう36だろう。義明君、結婚は？
義明　え？
栗原　金髪の彼女はいないのかい。
義明　いえ、パートナーはいますけど。
栗原　ああ、いても遊びの相手ってことか。
義明　いや、そういうことじゃなくて、
照之　僕ら形にはとらわれないんですよ。結婚しなくても愛し合えるわけだし。
仁美　アーチストは自由なのよ。ゲイの人も多いんでしょう？
義明・照之　ええ、まあ……。
仁美　おじさん、この話題、お父さんの前ではしないでね。火の粉が必ずあたしに飛んでくるから。
栗原　だけどいまやこのうちの一番の関心事だろう、娘と次男坊の結婚は。俺が言わなくてもオヤジのほうから言い出すんじゃないのか。
仁美　だから恐怖なのよ、このバーベキュー大会が。女は２５までには結婚しろ。30までに子供を二人つくって専業主婦になれって、そう言われて育ったのよ。
栗原　あいつは堅いからなあ。堅いやつが多い鉄鋼会社でも一番堅いほうだった。

仁美　よくおじさんと仲良くなったわねえ。
栗原　そこはまあ、割れ鍋にとじぶたみたいな……。（義明たちが気になる）
仁美　やだ、ふふ、それ男と女のことでしょう。
栗原　いや、男と男でも、言うんじゃないかな……。
仁美　……。（栗原の目線を追って義明たちをチラ見して妙な様子に気づく）

この時、義明と照之の視線や手のからませ合い方はもはや尋常を超えているのである。仁美と栗原は瞬時に「なにかそういうこと」であることを直感するが、「いやそんなはずがない」「できれば自分の邪推であってほしい」という思いから、お互い気づかなかったことにして愉快で罪のない話題を必要以上に盛り上げようとする。この判断はできるだけ瞬間的に行われる。

仁美　そういえば、おじさん、
栗原　え、なに？
仁美　あたしいま雑誌にエッセイを連載してるのよ。
栗原　へえ、そりゃすごいな、なんて雑誌？
仁美　文芸世界。
栗原　ああ、月刊誌だな。こんな分厚い。
仁美　そう。
栗原　ああいう雑誌はいまでも読む人いるのかい。
仁美　読書好きには根強い人気があるのよ。まあ若い人はあまり読まないけど。

喋りながらも義明たちをチラ見していた仁美、ついに義明と目が合ったのである。

仁美　……そういうことなの？
義明　そういうことなんだよ。
仁美　……おじさんなんか言ってよ。
栗原　できれば気づかんことにしたかった。いや、俺は決して悪いことだとは思ってないよ。会社勤めのころは、二丁目に何度も遊びに行ったし、そういうことには理解があるほうなんだ。だけど問題は、君

があの頑固おやじの息子だってことで。
仁美　そうよあんたどうすんのよ。ていうかあたし何か頭がグルグル廻ってきた……じゃあ、このバーベキューにテル君を連れてきたってことは、
義明　オヤジに紹介するつもりだよ。パートナーとして。
仁美　いやいやいやそれはどうかな、あたしとおじさんにとどめておいたほうがよくないかな。
栗原　俺は祝福するよ。
仁美　そうね、あたしも祝福する。
義明・照之　……。（義明と照之、手を強く握り笑顔を見合わせる）
仁美　あたしもね、いまちょっとショックはショックなんだけど、物書きの端くれだし、人にはいろんな生き方があるって理解はしてるつもりなのよ。
栗原　テル君もいい青年みたいだしな。
仁美　そうね、あたしも友達になりたいタイプよ。
照之　ありがとうございます。
仁美　だからもう、それでいいんじゃないかな。わざわざあんな分からず屋のオヤジに言わなくても、
栗原　癇癪起すだけだよ。
義明　だけどもう一緒に住んで二年なんだよ。このことを家族みんなに認めてほしいし、
栗原　結婚するならまだしもだよ。
仁美　そうよ、もう大人なんだからいちいち親に紹介しなくてもいいわよ、付き合ってる人を。
義明　テルを紹介するってだけじゃないんだよ。こういう僕のＳｅｘｓｕａｌな指向そのものを、ＭｙＦａｍｉｌｙにはＦａｉｒ＆ＳｑｕａｒｅにＣｏｍｅＯｕｔしたいと思ったんだ。あの高慢で杓子定規で頑固なオヤジが、一年で一番機嫌のいい、このバーベキューの日に。

義男、つづいて邦子が登場。義男はランニング、麦わら帽子など昭和のオヤジなスタイル。

義男　よお、みんな食ってるか！
仁美たち　（口々に「はーい」「食ってるよ」「いただいてまーす」など）
邦子　みんな全然食べてないんじゃないの。

仁美　さっき食べたわよ焼きながら。
邦子　もっと食べてよ、お父さんがどんどん焼いちゃうのよ。テル君食べてる？
照之　はい、いただいてます。
邦子　クリさんもね。
栗原　いや、俺はもうお腹いっぱい胸もいっぱい頭もいっぱい。
義男　馬鹿、年寄りじみたこというな。
栗原　年寄りだろお互い。だいたいお前はなんだよ裸の大将みたいなカッコしやがって。
義男　暑いから脱いだ。ハハ。

義和、つづいて美枝子もそれぞれバーベキューの紙皿を持ち、グリル台のほうからやってくる。以下、美枝子は皿の片付けやコップの持ち運びなど、嫁らしく動く。邦子も時おり手伝う。仁美も手伝うべきだが事の成り行きが気になって動きがたい。

義和　お父さん、火に近づきすぎなんだよ。
美枝子　焼け具合を見てらっしゃったのよ。
義和　だからって近づきすぎだろう。もう少しで自分が焼けそうになったんですよ。
皆　（笑う）
栗原　誰も食わねえぞ、煮ても焼いても食えねえオヤジだからな。
義男　食われてたまるか。お前も知ってるだろう。大阪万博のころの俺の活躍を。
仁美　またその話？
義男　義明の友達が聞いとらんよ。君、聞きたいだろう。
照之　はあ……。
義男　（返事を待たず）あのころはまだまだ鉄の時代だよ。自動車、造船、建築、鉄は資材の王様だ。俺が入社したのはオリンピックの年だよ。次の大イベントは万博だ。パビリオンが建つ。鉄を使う。だが当時の課長はのんびりしてたんだ。そんなもん一つ建てたってたいした売上にはならんよ、よそにやらせておけって。だから俺は酒の席で言ってやったね、新人みたいな俺がだよ。建物を一つつくるって話じゃないんだ課長、と。このニッポンが焼け跡の屈辱を乗り越えてここまで来たんだということを世界に胸を張って見せるんです

よと。わが社がやらないでどうするんだーっ、言ってやったんだよ。
そしたら課長アワ食っちゃってさ、そうか、じゃあやるかって言って。で、大手柄だよ、課長出世させちゃったよ、新人みたいな俺が、ハハ。邦子もこういう俺に惚れたんだよ、なあ、ハハ……。

邦子　ハハハ

義男　これが俺の武勇伝の始まりだよ、次はオイルショックの時にだな、

義和　もういいよ、何度も聞いたよその話。

義男　何度したっていんだよ。あの頃のニッポンが持っていた活力と、戦争に負けた悔しさは、若いもんに何度でも語っていかんと。

義明　それを言うなら、戦争をやってしまった反省と悲劇でしょう。

義男　何を反省するんだ。あれはアメリカに追い込まれて始めた戦争だぞ。だいたいそういう考えがニッポンを駄目にしたんだ。なんでもかんでも自分たちが悪かったって。

照之　じゃあの戦争は正しかったとお考えですか。

栗原　テルくん、

義男　必要以上に卑下するなと言っとるんだよ。震災の時に見せた若者たちの奉仕の精神は素晴らしかったじゃないか。ああいう力がニッポンにはあるんだよ。だからアメリカの言いなりになっちゃいかん。だいたいあの国は自分の都合しか考えとらんくせに世界の学級委員みたいな顔しやがって。なんだその、カルタだか花札みたいなのが大統領になったんだろ？

栗原　トランプ！もういいよ、そういう話は。息子がアメリカにお世話になってるんだし、

義男　あ、そういや義明はいつこっちに戻ってくるんだ。36にもなってフーテンみたいなことはしてられんだろう。

義明　考えてるよいろいろ。

義男　戻ってきたら堅いところに勤めて結婚しろ。子供が三人もいるのに孫がいるのは義和のとこだけなんて淋しいよ。（義和に）そっちはどうなんだい。

義和　え？

義男　このうちで一緒に暮らすって話だよ。和彦、今日は残念だったな、熱出したんだって？

美枝子　寝冷えして夏風邪引いたみたいなんですよ。今日も来たがってたんですけど。

義男　まあいいさ、夏休みの終わりにでもまたやろう。

美枝子　はい。

義男　で、引っ越しはどうする？こういうのは学校の変わり目がいいんだ。和彦、来年は中学だろ。それまでに高井戸のマンション引き払って越してこいよ。このへんの中学は野球も強いぞ。和彦、野球好きだもんなあ。なあ義和。

義和　まあ、考えてるよいろいろ。

義男　で、仁美はどうだ。・・・仁美、どこ行った？・・・何隠れてんだ。

仁美　隠れてないわよ。なに？

義男　なにじゃないよ。お前に聞くのは結婚のことに決まってるだろう。

仁美　相手いないのよ。

義男　なんでいないんだよ、いつもそんな、作業服みたいなもん着てるからだ。見つける気はあんのか。

仁美　そりゃまあね、

義男　じゃあ努力をしろよ。いまは結婚相談所みたいなもんがいっぱいあるだろう。

仁美　がんばるわよ。

義男　まったくもうどいつもこいつも、何を考えてるかわからんよ。想像のつかんことばかりだ。

義明　そうなんですよ、お父さん。

義男　え？

義明　お父さんの想像もつかないことが人生にはいっぱいありましてね、実を言うと、あなたの息子の、この僕は、

仁美、グリル台のほうを見て。義男の気をそらすため。

仁美　あ、大変、なんか煙出てる。

美枝子　あ、ごめんなさい、ピーマンかシイタケだわ。

義和　もう真っ黒こげだろう。

美枝子　ちょっと行ってくる。（グリル台のほうへ退場）

仁美　お父さんも行ったほうがいいんじゃない？

義男　え？

仁美　お父さんがいないと駄目なのよ、バーベキューは。ねえ、お母さん。

邦子　そうねえ、

栗原　あ、俺、肉もっと食おうかな、なんか食欲出てきちゃった。

仁美　あ、あたしも食べたい。お父さんが焼いた肉が食べたい。

義男　そうか？じゃまた焼いてくるか。

仁美　うん、焼いてきてよ。

栗原　焼いてっ焼いてっ。
義男　じゃもうちょっと焼いてくるか。邦子も来い。肉切ってくれ。
邦子　はいはい。

義男と邦子、グリル台のほうへ退場。

仁美・栗原　ハァー（ため息）
義明　言わせないつもりだね。
仁美　言う必要ないわよ。せっかくのバーベキューが地獄になるだけ。
義明　おじさんまでなんだよ、「焼いてっ焼いてっ」。
栗原　必死だったんだよ！
義和　なんの話？義明、なんかオヤジに言おうとしてたのか。
四人　……。
義和　言えよ。何言だよ。
義明　実は僕、ゲイなんだ。テルがパートナー。ＮＹでもう二年一緒に暮らしてる。それをオヤジに言おうと思った。もちろん兄さんにも、おふくろにも。
二人　あっさり言った。
義明　……。
義和　やっぱりか……！
二人　え！？
義明　兄さん知ってたの？
義和　どうもそんな気がしてたんだ。小学校のころお前、電気あんま好きだったろ。こういうやつ。（と、電気あんまの身ぶり）
義明　いや、あのころはまだ違うよ。
義和　中学の時は柔道部だったんですよ。だいたい柔道部のやつっていうのは、
義明　いやそれも関係ないって。大学出てニューヨーク行ってからだよ。
義和　きっかけはなんだ。
義明　ザコ寝かな。友達の展覧会のあとの。
義和　マリファナパーティーか。
義明　いやそういうのはもう流行らないんだよ。テキーラの回し飲みはしたけど。兄さんが思ってるようないやらしいものじゃないんだ。どっちかっていうと人類愛に近いよ。男も女も関係ないっていうか。そのころはまだ気が向けばって感じだったけど、本格的になったのはテルに会ってからだね。ぜんぶの人間をひっくるめて一番

パートナーになってくれる存在、それを確信したんだよ。
照之　アキ……。（微笑んで義明の手に手を重ねる）
義明　テル……。（その手にまた手を重ねる）
義和　……。
仁美　兄さん、あの、いろいろ思うところはあると思うんだけど、とりあえずあたしとおじさんはね、
義和　義明。
義明　なに？
義和　俺はね、俺はね……こういうことには理解があるほうなんだ。
義明　ああ、そう、嬉しいよ。
義和　というのもね照之君。
照之　はい。
義和　僕は、大手の食品会社の宣伝部に勤めてるんですよ。
照之　そうですか。
義和　いわゆるおねえ系のタレントさんにもＣＭをお願いしてましてね、お会いする機会もあるんだけど、感心しますねえ、現場での気遣いがすごいんですよ、スタッフにも優しいですしね、なにしろ頭の回転が抜群に早い。そりゃいろいろ苦労もあったんでしょうけど、それをぜんぶ消化して、人間性の豊かさに転化してるって言うか。だからね、義明にそういう傾向があったということも、恋人が照之さんだと言うことも、そりゃちょっとはね、ちょっとはショックなところもないではないけど、大まかに言って祝福したいと思うんですよ。
照之　ありがとうございます。
義明　（同時に）ありがとう。
義和　ただね、あのオヤジに言う事だけはやめといたほうがいい。
仁美・栗原　ほらほらほらほらほら……
義和　ありゃひどい堅物なんだ。君もいま見たでしょ。
照之　はい……。
義和　昭和の遺物なんだ。あんなのに話が通じっこないよ。
仁美　あたしもそう言ったの。
義和　だろ？
栗原　俺もそう言ったんだよ。癇癪起すだけだって。
義和　ですよね。俺たちは聞いた。理解した。それで十分だ。この三人にとどめておけ。
仁美　お母さんには？

義和　言わない方がいいよ。
仁美　でもお母さんはわかってくれるんじゃないかな。
義和　そうだとしてもオヤジの耳に入るだろう。
義明　実はもう言ったよ。
三人　え？
仁美　いつよ。
義明　バーベキューが始まる前。
義和　おふくろなんだって？
義明　「話してくれてありがとう」って。拍子抜けするほど落ち着いてたよ。
照之　僕にも言ってくれました。「義明と仲良くしてあげてね」って。
仁美　お父さんのことは？
義明　好きにすればいいって。怒鳴り散らすだろうけどその時は味方になるって言ってくれたよ。
栗原　肝っ玉座ってるなあ、邦ちゃんは。
仁美　あの人、そういうところがあるのよ。ぼんやりしてるかと思うと、どーんとしてんの。
義和　あのオヤジと45年も暮らしてるんだ。そうでもないとやってけないよ。

と、グリル台のほうから美枝子がやってくる。エプロンにはバーベキューのタレが思い切りついている。

美枝子　あなた、
義和　え？
美枝子　ちょっと来てよ、大変なのよ。
義和　なんだよ、いまこっちも…
四人　あ…
義和　…おいどうした、タレはねたのか。
美枝子　お父さんがね、タレ入れたバットにお肉叩きつけたのよ。
義和　また乱暴なことを……おふくろと喧嘩か。
美枝子　例の話よ。
三人　え？
美枝子　引っ越し。
義和　ああ。
美枝子　さっきああいう話が出ちゃったじゃない？お父さんがまた蒸し返

義和　してね、あたしが困ってたら、お母さんが見かねてくれて、おふくろ言っちゃったのか。
美枝子　うん。
義和　なんでだよ、俺が言うことになってただろう。
美枝子　しょうがなかったのよ、あなたがグズグズしてるから。
義和　グズグズしてないよ、タイミングを見計らってたんだよ。
仁美　なんの話？
義明　大変そうじゃない。
義和　お前が言うなよ。もっと大変なやつが。
美枝子　義明さんも大変なの？
義明　ええ、実はですね。
義和　いいよ、長くなるから。
栗原　でなんの話だよ。
美枝子　永福町。
栗原・仁美・義明　え？
義和　美枝子の実家だよ。丸山さんち。
美枝子　前は兄の家族と住んでたんですけど、仕事の関係で海外へ行ったんです。だからいまは父が一人で。
仁美　お兄さん、確か建築関係の、
美枝子　そう、中国行ったのよ。タワーマンションの建築ブームで。
義明　ああ。
美枝子　で、むこうの人に頼りにされちゃって、このまま家族と永住しそうな気配なの。
義和　美枝子のお母さんは亡くなってるし、丸山さん一人ぼっちになっちゃったんだよ。だから俺たちが一緒に住んでやりたいと思ってるんだけど。
栗原　そりゃオヤジ怒るよ。孫と一緒に暮らしたがってるんだから。肉叩きつけちゃうよ。
美枝子　お義母さんには前もって相談してたんですけどね。

と、グリル台のほうから邦子と義男。

義男　そんな話、俺は知らなかったよ。お前はいつ聞いたんだ。
邦子　だから十日ぐらい前よ。電話で話して。
義男　なんでその時言わなかった。
邦子　今日直接話すって義和が言ったのよ。

義和　悪かったよ、あとで言うつもりだったんだよ。
義男　じゃっさっさと言えよ。俺が怖くて邦子に言わせたのか。
美枝子　そうじゃないんですよ、あたしをお母さんがかばってくれて、
義和　改めて言いますよ。僕らは来年、永福町の丸山家に引っ越そうと思ってます。美枝子のお兄さんは海外に行きっぱなしみたいだから、
義男　僕らがかわりに、
義和　ふざけるな、お前はこのうちの長男だ。
義男　そんなことはどうでもいいでしょう。お父さんにはお母さんがいる。美枝子のお父さんは一人で心細いんですよ。
邦子　そんなのむこうの勝手な都合だよ。邦子もなんか言ってやれ。
義男　いいと思うわよ、あたしは賛成。
邦子　おい。
義男　だって一人じゃお気の毒よ。和彦のことも可愛がってくれるみたいだし。
義和　あの子は野球が好きなんだ。俺と話が合うんだよ。
義男　ほんとはサッカーが好きですよ。
義和　違うよ、野球が好きなんだ。
義男　おじいちゃんが怖いから嘘ついたんだよ。
義和　ちゃんと言えるんだよあいつは。ショートは黒江、セカンドは土井、お父さんが無理やり覚えこませたんじゃないか。巨人のＶ９時代のオーダーなんて和彦、興味ありませんよ。ほんとは永福町のおじいちゃんと気が合うんです。今日だって見舞いにきてくれて、今ごろ一緒にテレビでサッカー見てますよ。
美枝子　あなた、
義和　この際だから言ってやろうよ。僕だって、話が弾むのは丸山さんのほうですよ。あの人は元・会社の上司です。新人時代の僕を鍛えてくれました。尊敬してます。僕にとってはお父さんより、父親のような存在なんです。
栗原　義和君、それは言い過ぎだよ。
義和　違いますよ、ずっと思ってたことです。僕の歴史はこの人への反発の歴史でしたよ。大学も国立へ行けと言うからわざと私立へ行ったんです。就職も鉄鋼とか造船とか、ともかく国の基幹になるような、でっかいものをつくる堅い会社へ行けと言ったからわざと、麻婆豆腐とかお粥とか、ちっちゃくてやわらかいものを作る会社に入ったんだ。
美枝子　ぷっ。

義和　ここ笑うとこじゃない！
美枝子　あ、ごめんなさい。
義和　いやともかくね、ある意味ありがとうなんだけど、オヤジに反発することが僕らの人生を半分ぐらいはつくったってことだよ。仁美もそうだよ。女子大行けって言われたのにわざとオヤジが嫌がる早稲田へ行って、いい会社入ってお茶くみでもしろって言われたから、わざと出版社入ってしかもフリーになって、早く嫁に行けるようにきれいなかっこしろって言われたから、かえってわざわざこんなにきたないかっこを、
仁美　ちょっと違うけど。いいわよ私のことは。
義和　義明なんてもっとすごいよ。一番嫌がる美大へ行ってせっかく入ったデザイン会社もやめてニューヨークで売れないアーチストだよ。しかも金髪の嫁さんでも連れてくるかと思ったら、
栗原　義和君、
義明　にいさん、いい流れをありがとう。ねえさん、言うよ。
仁美　ああ……。（頭を抱える）
義明　お父さん、ちょっとこれ、唐突に聞こえるかもしれないけど、僕、実はゲイなんだ。そういう素質がもともとあったのかどうかは自分でもわからない。ともかく気が付いたのはニューヨークへ行ってからなんだ。女の子とつきあってもうまくいかなかったし、わかった時は自分でも納得できた。テルは、さっきは友達として紹介したけど、実は僕の恋人でもう二年いっしょに暮してます。結婚するつもりはないけど、このままずっと一緒に暮らしていくつもり。このことはバーベキューの前にお母さんに話して理解して貰えたと思う。にいさんとねえさんと栗原のおじさんは、内心は複雑だと思うけど、とりあえず祝福してくれた。だからできればお父さんにも、祝福とまでは言わないけど、ああ、義明はそういうやつなんだと、気持ちに収めてほしいと思います。もし都合が良ければ、今夜テルとこのうちに泊まっていくこともできるんで、その時にいろいろ話せれば。そういうわけで、
義明・照之　よろしくお願いします。

蝉しぐれ。皆、義男の反応を伺うが、義男は動かない。
と、おもむろに裏口のほうに歩き出す。

邦子　どこ行くんですか。

義男　こんなとこにいられるか。
邦子　待ってよ。義明がいまいっぱい喋ったじゃない。ずいぶん覚悟してのことよ。お父さんにああいうこと言うのは。わかったとかわからないとか、なんか言ってやったらどうなの。
義男　わかるかそんなもの。
邦子　そう言ってるわよ義明。
義明　じゃあ今夜とことん話そうよ。きっとゲイに対する誤解もあると思うし、
義男　話す必要はないよ。義和とも義明とも。ふざけるな。（行こうとする）
邦子　話してくださいよ、二人ともあなたの子供よ。
義男　なんだお前、偉そうに。
邦子　偉いとか偉くないじゃないですよ。まずちゃんと聞いたらって言ってんの、ふざけるなで終わらせないで。
仁美　お母さんいいこと言った。あたしもそう思う。
義男　口をはさむな、お前はさっさと嫁にいけ。
仁美　関係ないじゃん。
邦子　あなたがそうだからみんな言いたいことが言えないの。だからこういう時に、一度に爆発みたいになっちゃうんですよ。
義男　お前もあるのか、俺に言いたいことが。
邦子　そりゃありますよ。
義男　なんだ、言ってみろ。
邦子　いいわよ、今は子供たちの話でしょう。
義男　いいよ、いいから言ってみろ。
義和　お母さん言ってやんなよ。いい機会だよ。
仁美　あ、じゃあこないだのこと言ったら？
栗原　なんだよ、心当たりあんのか。
仁美　会った時ちょっと話したのよ、お墓のこと。
義和　お墓？
仁美　桃太郎が死んで以来、お母さん気になってんの。岡山のお墓遠いし、お墓詣り行きにくいでしょう？それに八ツ墓村の隣だし。
栗原　八ツ墓村？
仁美　モデルになった村の隣なのよ。だからオバケが出てきて怖いって。
義和　だいじょぶだよ、お墓入る時はお母さんもオバケだから。
仁美　そう、あたしもそう言ったの。
栗原・仁美・義和・美枝子　ハハハ。

義男　ふん、馬鹿馬鹿しい。話にもならんよ。吉野家の人間はみんなあの墓に入ることになってるんだ。墓参りは毎月本家がやってくれるよ。子供たちは年にいっぺん掃除にくりゃいいさ。俺たちだってそうしてたじゃないか。だいたい俺もお前もまだピンピンしてるよ。縁起の悪い話はするな。（行こうとする）

邦子　ちがうのよ。死んでまで、あなたとおんなじお墓に入りたくないのよ。

皆、邦子を見る。

邦子　……。

邦子、足早にグリル台のほうへ去る。

義和　お母さん。

義男　おい、いま邦子なんて言った。

栗原　さあ、よく聞こえなかったな。

義男　ウソつけ。聞こえたろ。

栗原　じゃあお前も聞こえたろ。怒るなよ。お前が話を聞かんからだ。

義和　いい啖呵でしたよ。お母さんにしてはよく言ったよ。

美枝子　言い過ぎたと思って反省してるんじゃない？

仁美　何してる？

美枝子　グリル台の前でぼんやり立ってる。あ。お箸とった。あ、焼きさましのお肉食べだした。

栗原　邦ちゃんの癖だよ。むしゃくしゃするとむしゃむしゃ食うんだ。

義和　（邦子に）お母さん！俺たちも食うよ！

義和と美枝子、グリル台のほうへ去る。

義男　……ふん、わけがわからんよ、どいつもこいつも。（裏口のほうへ去る）

栗原　おい、どこ行くんだ。

義男　（声）パチンコ！

栗原　俺も付き合うよ！（仁美に）なだめてくるよ。

仁美　すいません。

栗原、急ぎ足で裏口のほうへ去る。

義明　あれじゃ話にならないな。今日は宿に泊ろう。
照之　そうだね。
義明　じゃあ、俺たちも焼きさまし食っちゃおう。（グリル台の方へ向かう）
照之　それ食べたらバーベキューは終わり？
義明　そうだな、人生は続くけど。
照之　かっこいいよ、ＡＫＩ。
義明　ＴＥＲＵ。

義明と照之、笑いながらグリル台のほうへ去る。音楽。

仁美　あたしにとって衝撃的だったのは、弟の告白より、兄の宣言より、母が放った一言だった。あの一言は重いわよ。夫婦の歴史がうしろにあるから。兄やおじさんは勢い余っての捨て台詞みたいに扱おうとしたけど、その重みに気づいてたのかどうか。父はどうだろう？男というものは繊細なのか鈍感なのかいまだにわからない。こういうふうに考えてみる。あんな気持ちは母にとって焼きさましの肉なのだ。何十年の歴史の中で、心ではもう何度も呟いたこと。でもお墓に入ることが現実味を帯びてくると、電子レンジで温めたように、焼きさましが湯気を立て始めた……。これはあとからわかったことだけど、このとき母には家族とは別の相談相手がいたの。南阿佐ヶ谷のファミレスが、もう一つの電子レンジの役目を果たしていた。

暗転。

【3場／ファミレス】

南阿佐ヶ谷のファミレス「Happy Diner」。待合席付近。店の入り口、客席、ドリンクバー、トイレなどの交差点でもある。
ドリンクバーのほうから、多田陽子と当店ウエイトレス・中島聖子が現れ立ち話。

聖子　へえ、朗読のボランティアですか。
陽子　そう、目の不自由な人や読むのが億劫になったお年寄りに読んであげるの。対面で直接やることもあるけど、声を吹き込むこともあるのよ。
聖子　じゃあ、いつもお集まりの皆さんはそのお仲間ですか？
陽子　佐和子さんと邦子さんはね。ほら、メガネかけたちょっとインテリっぽい人がいるでしょう。
聖子　ええ、いつもお勘定まとめてくださる。
陽子　そう、その人が佐和子さん。いまは引退したけど大学の先生だったのよ。
聖子　へえ。
陽子　それから、あの、ちょっと小柄な感じの、
聖子　ああ、あの、笑った顔が福笑いみたいな。
陽子　そう、あの人が邦子さん。だけど福笑いって、ふふ、あなた言うわね。
聖子　すみません。

と、自動ドアの開閉音と「いらっしゃいませ」の合成音声とともに、入口のほうから佐和子登場。

佐和子　こんちは！
聖子　佐和子さん？
陽子　正解。
聖子　あ、いらっしゃいませ。
佐和子　あら、仲良くなったの？
聖子　ええ、いまドリンクバーで、
陽子　カプチーノの入れ方教わったのよ。

佐和子　ああ、あれはエスプレッソとミルクを合わせて作るのよね。
聖子　ええ、ミルクはスチームで泡立てるんです。
佐和子　出る時すごい音がするよね、シュポシュパーッて。
陽子　ハハ、すごい音よね、シュポシュパーッて。
佐和子　オーダーしていい？
聖子　はい。
佐和子　あたしもドリンクバー。
聖子　同じお席でいいですか？
陽子　そうして、いつも通り。
聖子　かしこまりました。ちょっと失礼します。

聖子、ハンディ端末で入力する。

佐和子　山田のじいさんの対面だったのよ。
陽子　そうおつかれさま。何読んだの？
佐和子　般若心経。
陽子　ああ、あれ人気あるわね。あたしも読んだことあるわよ。カプチーノでいい？
佐和子　うん、シュポシュパーッてやってきて。
陽子　ＯＫ。

陽子、ドリンクバーのほうへ退場。

聖子　あの、ちょっと聞いてもいいですか？
佐和子　どうぞ。
聖子　般若心経の朗読って、お坊さんみたいだなと思ったんですけど。
佐和子　ああ、ハハ、お経そのものじゃないのよ、解説本なの。
聖子　ああ。
佐和子　読む相手はお年寄りが多いのよ。そうなるとやっぱり心の持ち方についての本が人気高いわね。死んでいく覚悟をつくるみたいな本も。
聖子　死んでいく覚悟ですか？
佐和子　エンディングノートって知ってる？
聖子　聞いたことあります。遺言や遺産のこと書くんですよね。
佐和子　それだけじゃないのよ。学生時代の思い出や旅の記録、宝物……そういうことを書くページがたいていあるわ。来る日に備えて人生

を総括しておきなさいってことね。そのための指南書もずいぶん出てる。

聖子　なるほど。

佐和子　本は読むほう？

聖子　ええ、ミステリーは好きです。

佐和子　ああ、あたしも若い頃は好きだったわよ、松本清張とか。

聖子　あたし東野圭吾とか。

佐和子　横溝正史とか。

聖子　伊坂幸太郎とか。

佐和子　全然合わないわね。

聖子　すいません。

佐和子　まあともかく、最近は読まないのよ。というのも登場人物がわかんなくなっちゃってね。

聖子　ああ。

佐和子　齢をとるとたくさんの登場人物は必要ないのよ。その代わりなんでも話せる友達が、少しだけ必要。

聖子　へえ、深いですねえ。

ドリンクバーのほうから陽子がコーヒーカップを持って登場。

陽子　やってきたわよ、シュポシュパーッって。

佐和子　ああ、ありがと。

陽子　しばらくここにいてもいいかしら。ドリンクバーが近くて便利なのよ。

聖子　あ、ここ待合席なんですよ。いま客席がいっぱいなんで、もしウェイティングのお客様が出ましたら……。

佐和子　お店に迷惑はかけないわよ。常連の心得。

聖子　じゃあ見逃します。いいお話も伺えたんで。

佐和子　またいつでもね。

聖子　お願いします。ごゆっくり。

聖子、客席のほうへ退場。

陽子　手なずけたわね。

佐和子　本が好きなのよ。いまどきいい子。（客席のほうを指して）みんな

いるの？
陽子　いつものメンバーよ。竹内さんと祥文さんと邦子さんと由利江さん。
佐和子　そのメンバーだと竹内さんばっかりが喋りそうね。
陽子　それより邦子さんよ！
佐和子　邦子さんどうしたの？
陽子　ついに、旦那に言ったんだって。「あなたと一緒のお墓には入りたくないのよ」って。
佐和子　へえ、噂の頑固ジジイに。
陽子　そう、先週バーベキューの会があってそこで。
佐和子　あらら、良く言ったわねえ。思っててもそれだけは言えないわよ、なんて言ってたのにねえ。
陽子　息子や娘もみんないたらしいの。
佐和子　あらら。
陽子　みんなびっくりしたみたいよ。ひたすら横暴に耐えてきたお母さんがそんなこと言ったわけじゃない？だけどどうリアクションしたらいいかわかんなかったんでしょうね。あんまりそのことには触れないで、みんなで焼きさましの肉食べたって。
佐和子　旦那は？
陽子　特に変化はないらしいのよ。パチンコ行って飲んだくれて帰ってきてあとはいつも通り。
佐和子　でもまあ大きな前進よ。褒めてあげなきゃ。

客席の方から、空のコーヒーカップを持って邦子が登場。

陽子　来た！
邦子　あら佐和子さんこんにちは。みんないるわよ。
佐和子　聞いたわよ。ついに言ったんだって？ご主人に。
邦子　ああ。だけどあれは夢だったんじゃないかと思うわよ。その後、主人の様子も変わりなくて。
陽子　さざ波は立ったわよ。
佐和子　大波よ。あまりにショックで聞かなかったことにしたいのよ。
邦子　そうかしら。
陽子　話してれば？なんか入れて持ってくるけど。
邦子　自分でやるわ。あれ好きなのよ。シュポシュパーッて。

邦子、ドリンクバーのほうへ退場。

佐和子　元気ないわね。言っちゃったこと後悔してるのかな。

陽子　だとしたらちょっと責任感じるわね。ハッパかけたのあたしたちだし。

佐和子　心理学に「課題の分離」という考え方があるのよ。

陽子　やめてよ、ファミレスで大学の授業？

佐和子　あたしたちがハッパをかけて邦子さんが行動した。その結果後悔してる。だとしてもあたしたちには関係ないの。それは邦子さんの問題。

陽子　なんだか冷たいわね、その心理学。

佐和子　それがそうでもないのよ。邦子さんが悩んで相談して来たら、その時は自分のことのように一緒に考えてあげるわけ。

陽子　ああ、それは親切よ。

佐和子　だからいまはほっときましょう。邦子さんの課題の時間。

客席のほうから竹内弘がやってくる。

竹内　あ、ここにいたのか、早く戻ってきてよ。

陽子　なに竹内さん。

竹内　由利江さんが湿っぽい話ばっかりするんだよ。で、女性陣いなくなっちゃったから、俺と祥文さんでずっと聞いてんだけど、もうくたびれちゃってさ。

佐和子　何よ、湿っぽい話って。

竹内　いつものあれだよ。孤独死したらどうしようとか、そう思うと冷蔵庫にもモノ入れとけないとか、いつも来る野良猫には誰がエサやんのとか、ま、結局は一人暮らしで死ぬのが心配って、ま、そういうことなんだけどさ。

佐和子　そんなのみんな一緒よ。だからあたしたちだって日頃から役所の人と仲良くしてさ、顔覚えといてもらって、なんかあった時のためにね、

竹内　俺たちはそう思うんだよ、どっか抜けててアッパラパーだからさ、

陽子　ちょっと自分と一緒にしないでよ。アッパラパーじゃないわよあたしたち。

竹内　いやだから由利江さんは違うって言ってんだよ。心配性なんだよ。助けてよ。もう聞いてるだけでこっちもじめーっとなってきちゃ

って、
佐和子　わかったわよ、じゃあいきましょう。
陽子　（ドリンクバーのほうへ）邦子さーん、席戻ってるわよ。

邦子、ドリンクバーのほうから顔を出して、

邦子　じゃそうして。ちょっと迷ってんのよ。
陽子　カプチーノじゃなかったの？
邦子　だっていろいろあるじゃない、ココアとかリアルゴールドとか、
佐和子　ゆっくり迷えばいいわよ。ドリンクも、人生のピリオドの打ち方も。
陽子　佐和子さんが言うと深いわねえ。
佐和子　先生はこうやって騙すのよ。
女性三人　ハハハ。
竹内　早く行こうよ。
陽子　わかったわよ。

竹内、佐和子、陽子、客席の方へ退場。邦子、ドリンクバーのほうへ退場。入口のほうから仁美登場。初めて来た店らしく、どちらが客席かやや迷う。
と、聖子が客席のほうからやってきて、

聖子　いらっしゃいませ。すみません、いまお席のほういっぱいでして、
仁美　待ち合わせなの。
聖子　あ、じゃあご覧になってください。
仁美　（客席のほうをサッと見て）いないみたいね。
聖子　女性でいらっしゃいますか？
仁美　そう、あたしより４つ下なんだけどね。
聖子　じゃあ、28歳ぐらいの方ですか？
仁美　え、ふふ、じゃああたし32ってこと？ふふ、やだ、ふふ……。
聖子　あ、すいません、いつもマネージャーにお客様の齢はなるべく下に言えと言われてまして、あんまり効果的だったんでびっくりしてます。
仁美　じゃあほんとはいくつだと思ったのよ。
聖子　42ぐらいですか？
仁美　悔しいけどドンピシャよ！
聖子　38ぐらいの方ですね。（客席のほうを見て）いらっしゃいませんね

え。

仁美　ここで待っててていいかしら。

聖子　申し訳ありませんがそうお願いします。お席空いてからご案内しますので。

仁美　はいはい。

と言いながら仁美、ベンチへ。聖子は軽く頭を下げ客席の方へ退場。仁美、豪快に股を開いて座り、ケータイをいじりだす。

ドリンクバーのほうから、邦子がコーヒーカップを両手を使って持ちゆっくりとした足取りでやってくる。カプチーノの泡を盛りすぎて、こぼさないようにしているのである。

仁美、一度ちらりと見て、妙なおばさんだと思うが、二度目には母であることに気づく。

仁美　お母さん、

邦子　あら仁美、あんたなんでこんなとこいんのよ。

仁美　友達と待ち合わせなのよ。お母さんこそなんでよ。

邦子　いつも来てんのよ、朗読の帰りに。お友達もいっぱいいんのよ。あんた紹介する？

仁美　いいわよ今は。ていうか、なんでカップ持って立ち尽くしてんのよ。

邦子　泡盛りすぎちゃったのよ、だからこぼれないようにね。

仁美　何やってんのよ、（邦子の手からカップを取りベンチに運ぶ流れで）ほら、ここ座ってちょっと飲んじゃいなさいよ。そしたらこぼれないから。

邦子　じゃそうしようかな。

仁美　ってか、盛りすぎだよ。

二人ベンチに座って。

邦子　お友達って？仕事のほうの？

仁美　うん、ライター仲間よ。お互い忙しい時はヘルプしあったりして。

邦子　そう、いいお友達じゃない。結婚は？

仁美　してない。だけどここんとこさ……ちょっとちょうだい。

邦子　それエスプレッソとミルクで作るのよ。

仁美　知ってるわよ。
邦子　ミルク出る時すごい音するのよ。
仁美　ああ、シュポシューパーってね。
邦子　そう、あれびっくりよね、最初やった時まわり見ちゃったわよ。
仁美　ハハハ。
邦子　で、しそうなの？
仁美　え？
邦子　結婚よ、お友達、ここんとこさって。
仁美　ああ、ていうか男ができたのよ。一度会ってくれって言うから会ったんだけど、あ、こりゃひっかかっちゃったかなーって感じで。
邦子　何やってる人？
仁美　ホスト。
邦子　それ恋人なの？お金取られてるだけじゃない？
仁美　あたしもそう言ったのよ。だけど（視野が狭くなってる手振りで）こうなっちゃって、話全然聞かないの。
邦子　あんたも気をつけなさいよ。
仁美　ほんとだよね。奴らつけこむのうまいから。
邦子　で、なんなのよ今日は。やめときなさいって忠告？
仁美　男が別れ話持ち出してきたんだって。
邦子　いいじゃない、いい機会よ、別れたほうがいいわよ。
仁美　ところが彼女が別れたくないわけよ。男の方はほかに好きな人ができたってはっきり言ってるのに。ホストの方が逃げ腰なのよ。
邦子　すごいお友達ね。
仁美　仕事一筋だったからわりとウブなのよ。アラフォーの女に多いパターン。

仁美、カプチーノを飲み干してしまう。

邦子　あんたぜんぶ飲んじゃったんじゃないの？
仁美　あ、ごめん。
邦子　いいわよ（カップを受け取りまたドリンクバーへ向かう流れで）、280円でいくらでも飲めるの。だから年寄りが一日じゅういるのよ。
仁美　ハハハ。

客席のほうから陽子が現れ、

陽子　邦子さん、何やってんのよ、呼びに来たのよ。
邦子　あ、ごめんなさい、娘とばったり会っちゃったのよ。
仁美　どうも、仁美と申します。母がいつもお世話になっております。
陽子　いえこちらこそ、朗読の方でご一緒してます多田陽子と申します。
仁美　はじめまして、よろしくお願いします。
陽子　伺いましたよバーベキューのこと。
仁美　え？
陽子　お父様にガツンとやっちゃったんでしょ？
仁美　ああ。
邦子　ちょっとやめてよいきなり。
陽子　あんたは早くそれ入れてきなさいよ。
邦子　はいはい。（ドリンクバーのほうへ退場）。
仁美　あの、母、なんて言ってました？ていうか、どれぐらい本気で言ったのか、あたしもずっと考えてるようなところがあって。
陽子　ええ、ええ、
仁美　売り言葉に買い言葉みたいな感じもあったんですよ。だけどひょっとすると、もっと深ーいところから出てきた言葉？みたいな、
陽子　そのへんはね、
仁美　ええ、
陽子　あたしたちにもわからない。
仁美　ああ……。
陽子　そういう話はよくしてたのよ、年寄りが集まって。
仁美　ああ、そうなんですか。
陽子　お墓の話もよくするのよ、独りもんが多いからね、
仁美　ああ、いろいろご心配でしょうしね、
陽子　邦子さんがね、ずっとご主人に不満があって、一緒のお墓に入りたくないわ、なんて言ってたから、じゃあガツンと言ってやりなさいよ、なんてハッパかけてたりはしてたのよ。
仁美　ああ、
陽子　だからそういう勢いもあったかもしんないのよ。
仁美　なるほどね。
陽子　なんか問題あったかしらねえ。
仁美　いえいえ、もともと、そんなに、
陽子　そうみたいねえ、難しいご主人みたいで、
仁美　かえってよかったんじゃないですかねえ、かえってこう（コミュニケーションする、という仕草で）きっかけみたいに、

陽子　ですよねえ、あたしたちもねえ、そうなればと思って、

邦子がグラスを持ってドリンクバーのほうから登場。

邦子　なにお喋りしてんのよ。
陽子　じゃあ行ってるわよ、よかったら娘さんも。
仁美　すいません、友人待ってますんで。
陽子　あ、そう、じゃあ。

陽子、客席のほうへ退場。

仁美　悪友なんじゃない？あの人。
邦子　なんでよ。
仁美　だってお母さんにハッパかけたんでしょう？ガツンと言ってやれって。
邦子　ああ。
仁美　お母さんらしくないと思ってたのよ。感化されたのね、お墓の心配をする一人暮らしのお年寄りたちに。
邦子　背中を押してもらっただけよ。あの人たちに教わったのは自分の気持ちに正直になれってこと。ただ、言うタイミングがまずかった。もっと落ち着いて話せばよかった。

邦子、客席のほうへ退場。仁美、その背中を見送り、わずかな時間、その言葉が意味するところを考える。

仁美　……。

と、入口のほうから、京本剛（ごう）登場。

剛　あ、仁美さん……。
仁美　あんた１００％気づいてたでしょ。遙香まだなのよ。
剛　あ、そうすか、仁美さんいると思わなかったな。
仁美　あたしも来たくて来てんじゃないのよ。迷惑なら帰るけど。
剛　いや、別にいいすけど。
仁美　もうすぐ来ると思うわよ、こっち向ってるってメール来たから。
剛　そうすか。

客席のほうから聖子登場。

聖子　いらっしゃいませ。申し訳ありません、ただいまお席のほう……あ。
仁美　いいのよこの人。さっき言ったあたしの友達の知り合いだから、よ。
剛　ほんとに来たんだ。……この人？
聖子　いや違うよ、この人は彼女の友達。
剛　ああ、だよね。（仁美に）すいません、失礼なこと、
聖子　いえ……。
仁美　（剛に）お客様もいらっしゃるし。
剛　そうだね、仕事続けてよ。
聖子　うん。

聖子、きまり悪そうに仁美に会釈して客席のほうへ退場。

仁美　どういうことかな？
剛　前、好きな子できたって言ったじゃないすか。
仁美　……今の子なんだ！
剛　ええ、遥香さんが信じてくれないんすよね。だから、
仁美　会わせるわけ？
剛　できればしたくはないんすよ。どうしても納得してくれなかった時の最終手段つーか……。

と、入口の方から高沢遙香（はるか）登場。

遙香　ごめんゴウ君、打ち合わせちょっと長引いちゃって。仁美さんもありがとわざわざ。
仁美　いえいえ、
遙香　なに席いっぱいなの？よそ行く？
剛　いやいいよ、ここで、すぐ空くでしょ。

と、客席のほうから聖子が来て、

聖子　いらっしゃいませ……あ……。
仁美　あなたまだいい。

聖子　すいません。

聖子、「あの女ね」とチラリと遙香を意識しつつ客席のほうへ退場。
遙香は一切気づかず、剛しか目に入らない感じで、

遙香　ゴウ君さ、
剛　うん、
遙香　ゴウ君は優しすぎるんだよ、突然別れようなんて言いだして。
剛　えーと、意味わかんないんだけど。
遙香　だって心配してくれてるわけじゃん、あたしがお金使い過ぎなんじゃないかとか。
剛　まあ、そういうのはちょっとあるかもしんないけど。
遙香　だよね、絶対そうだよ、前みたいにホストとお客の関係ならそれでもよかったけど、いまは全然、関係が変わっちゃったわけだし、
剛　あ、そのへん俺と見解が違うっつーか、
遙香　なんで自分の気持ちに嘘つくかな。
剛　嘘なのかな。
遙香　嘘だよ、優しい嘘。そんなお金の心配しなくていいよ、あたしがバリバリ働けばいいんだから。そういうとこ好きだって言ってくれたよね。
剛　そうだね、遙香さん、そういうとこは凄いと思う。
遙香　だよね、頑張ってるよねあたし。
剛　頑張ってるよ、俺すげえと思うよ、ライターの仕事とか才能もあると思うけど、やっぱ情熱じゃん。責任感も必要だしさ、やっぱ男社会で頑張ってる女の人ってすげえかっこいいなと思って、
遙香　（泣きながら）嬉しい、
剛　あれ
遙香　やっぱゴウ君だけだよわかってくれんの。ごめんね。
剛　いやいや、
遙香　なんか泣けちゃうんだよ、ゴウ君優しいから。仁美さんごめんね、
仁美　いやいや、
遙香　ちょっとトイレ行って来る。あ、カバン忘れた。……このおっちょこちょいめ。ゴウ君の前じゃ、泣かないって決めたのにな。

遙香、足早にトイレのほうへ去る。

仁美　あんた何やってんの？
剛　はい。
仁美　ほんと別れようとしてるの？
剛　してますけど。
仁美　ワキ甘いのよ。おべんちゃら言って喜ばしてんじゃないの。何やってんの、駄目よあれじゃ。
剛　喜ばしちゃうんすよね、女の人見ると。
仁美　なにそれ、ホストの職業病？
剛　つーか、母親に仕込まれたんすかね。子供のころ、ゲーム買ってもらえなかったんすよ。だけど褒めたり、肩揉んだらそく買ってくれて、それ以来すかね。中学ん時は女子の先輩ほめたら、わりすぐやらしてくれて。
仁美　それもうやめなさい、ほんとに別れたいなら。
剛　別れたいっす。つーか、もうホストやめようと思ってて。
仁美　やめてどうすんのよ。
剛　宝石屋とかどうすかね。
仁美　いいかもしんない。女褒めるワザが生きるよ。
剛　がんばります。

客席のほうから、洗浄したカップやグラスを入れたケースを持った聖子が現れ、

聖子　ゴウ、あたしどうしたらいい？
仁美　紹介しちゃえば？
剛　いいすかね？
仁美　あたしが許す。
剛　じゃあ、（ドリンクバーのほうを指し）そこスタンバイしてて。
聖子　わかった。
剛　ありがとうございます、協力していただいて。
仁美　見てて痛々しいのよ友達として。ここはバシッと断ち切るべきだと思う。頑張ってよ。
剛　はい。

トイレのほうから遙香登場。

遙香　ゴウ君、いま考えたんだけどさ、
剛　なに？
遙香　旅行行こうよ、沖縄とか。パッと気分変わるとこ。あたしスキューバやってみたいし。
剛　あの遙香さん、俺たち旅行とか言ってる場合じゃなくて。
遙香　いまのあたしたちにはゆっくり話し合う時間が必要なのよ。
剛　話しても無駄だよ。
遙香　休みなら取れるの、仁美さんが助けてくれるから。ね、お願い取材一本頼むわよ。
仁美　駄目よ。現実を直視しなさいよ。
遙香　なあに？
仁美　始まりがあれば終わりがあるってことよ。望みのない恋愛はしがみついちゃ駄目。
遙香　一緒にしないでよ、自分が望みのない恋愛してるからって。
仁美　ちょっと遙香。
遙香　妻子ある人と付き合ってるのよ。文芸世界って雑誌の編集長。最初は仕事の下心もあったけど、だんだんハマっちゃったんだって。
仁美　いいのよあたしは、最初から望みなんて持ってないんだから。あんたは望みのないものに望み持ってるからやめなさいって言ってんの。彼女がいるんだって。
遙香　だからそれはゴウ君の優しい嘘でね、
仁美　直視しなさいよ。（剛に）紹介すれば。
剛　このタイミング？
仁美　じゃあどのタイミングよ。流行語使っちゃうわよ。
剛　なんすか。
仁美　「いまでしょ！」。
剛　古っ！
仁美　出てらっしゃい！

聖子が現れる。

遙香　……。
剛　付き合ってる、聖子です。
聖子　聖子です。……いらっしゃいませ。
仁美　ちがうでしょ。
聖子　こんにちは。このファミレスでバイトしてます。

剛　こういうことしたほうがいいか迷ったんだけど、きちんと紹介した方が遙香さんに対しても誠実かなと思って。
聖子　あたしもそういうことなら会ってもいいよって言ったんです。
剛　夜は俺仕事あるし、酔っぱらって話したくなかったし。
聖子　じゃあバイト先連れてくればみたいな。実際ほんとになったらビビっちゃったけど。
剛　そういうわけで彼女はほんとに存在します。優しい嘘とかじゃなくて。遙香さんには感謝してます。いろんなもん買ってもらったし。遙香さん仕事も一生懸命だけど俺に対してもすげえひたむきで。それが途中から苦しくなって。恋は幻で、俺たちの仕事はそれを利用してるみたいなとこあんだけど、遙香さんはそれじゃすまなくなった。それはもう無理なんです。俺も幻みたいな仕事はもうやめたいと思ってて。聖子は全然違うフィールドで会った子なんで、幻じゃない俺出せるんで、聖子と付き合います。優しい嘘なんかじゃないし、俺、そんな優しくないす。
遙香　……わかった。……帰って。
三人　……。
遙香　二人とも帰って。
聖子　あの、あたしバイト中なんですけど。
遙香　じゃあ仕事つづけて。あたしのことはもう気つかわなくていい。ありがと。
聖子　はい。

聖子、ケースを持って客席のほうへ退場。

遙香　ゴウ君，行ってよ。
剛　え、いいの？なんか、俺言いっぱなしで中途半端っつーか、

客席のほうから、空のコーヒーカップを持った穏やかな笑顔の岡添祥文が現れ、年齢を感じさせる遅々とした歩みでドリンクバーのほうへ向かう。

遙香　映画じゃないんだから、ラストシーンはそんなにカッコよくないわよ。おじいさんが、よろよろ歩いてたり。
剛　……じゃあそういうことで。
遙香　「さよならの向こう側」「さよならはダンスのあとで」……さよな

らの歌はたくさんあるけど、このお別れの歌のタイトルはこれね。
「さよならは、コーヒーカップとおじいさん」。
……さよなら！

剛　剛、入り口のほうへ退場。自動ドアの開閉音と「ありがとうございました」の合成音声。祥文もドリンクバーのほうへ退場。

遙香　……。（泣く）
仁美　遙香、偉かった。
遙香　ごねたらみじめじゃん。
仁美　そうだね。
遙香　わかってたよ、幻なんて。
仁美　うん。
遙香　いつもそうなのよ。あたしの好きになる人、みんな幻なの。たぶん一生結婚できない。幻に恋して一人で死んでいく。やだーやだやだ・・・
仁美　遙香……。

と、客席のほうから邦子登場。帰り支度を済ませている。

邦子　仁美、あたしたち帰るわよ。
仁美　あ、そう。あのこれ、さっき言ってた友達。
邦子　ああ。
仁美　（遙香に）母なのよ。うちが近所なんでお友達と、
遙香　（涙をぬぐい必死で笑顔をつくって）あの、仁美さんの後輩の高沢遙香と申します。
邦子　そうですか遙香さん、いつもお世話になってるそうで。
遙香　いえいえこちらこそ……。

この間に客席の方から、それぞれ帰り支度を済ませた陽子、佐和子、竹内、由利江が現れている。竹内は自分の荷物に加え、祥文の散歩バッグを持っている。

陽子　邦子さん、みんなにご紹介したら。
邦子　そうね、娘の仁美とお友達の遙香さんです。

皆　（口々に、いい感じで挨拶。互いに紹介しあったり、長すぎない程度にリアルにがやがやしてください）。

と、ドリンクバーのほうからコーヒーカップを持った祥文が登場。

陽子　あ、祥文さん、いまもう帰るとこなのよ。

祥文　あ、そうなの？

竹内　荷物持ってきたよ。勘定も済ませたし。

祥文　なんだよ、シュポシュパーやっちゃったよ。

佐和子　じゃあ飲み終わるまで付き合いましょうよ。ベンチでお話ししながら。

邦子　そうね、あんたもちょっと付き合いなさいよ。

仁美　うん、じゃあ。

邦子と友人たち、ベンチに座る。皆ががやがやと席に着く間に、

仁美　遙香は帰っていいよ。

遙香　あたしいるわよ。なんだかいまは、お年寄りに癒されたい。

仁美　じゃあ。

二人もベンチに座る。

由利江　佐和子さん、やっぱり海のそばがよろしいんじゃないかしら。

佐和子　ああ、海はいいわね。

由利江　波の音が好きなんですよ。潮風に吹かれて眠れるし。

祥文　由利江さん、元気になったね。

竹内　話してるうちにすっかりね、へへ。

陽子　海もいいけど、牧場はどうかしらね。

由利江　牧場？

陽子　あたし動物好きなのよ。馬やら牛やらの鳴き声が聞こえて、楽しいんじゃないかしらね。

由利江　ブタもいますわよ。

陽子　いいじゃない、賑やかで。邦子さんどう思う？

邦子　そうねえ、ちょっと賑やかすぎるんじゃないかしらね。あたしも海

由利江　がいいわ。
仁美　でしょう？
邦子　なあに？みんなで旅行行くの？
仁美　そうじゃないのよ。お墓の話。
佐和子　お墓？
ここにいる年寄り、邦子さん以外はみんな独り者なのよ。だから死んだらお墓どうしようって、そういう話はずっとしてたんだけどね。
仁美　だけど皆さん、ご先祖さんのお墓はあるんじゃないですか？
佐和子　まあそのへんはね、事情がある人もいるし。
陽子　竹内さんなんか親戚一同に顔向けできないのよ、お金借りまくって返してなくて。
竹内　いいよ俺の話は。
由利江　あたくしもずいぶん嫌われてますの。こう見えてもあたくし、若い頃は美人だったんですよ。
仁美　……すいません、話が見えないんですけど。
陽子　夜のお仕事なさってたんだって。
仁美・遙香　ああ……。
陽子　面倒見てくれる人は次々にいて、
仁美・遙香　ああ……。
由利江　だけど齢をとると孤独ですよ。アリとキリギリスで言えばあたくしキリギリスです。キリギリスを慕ってくれるのは近所の野良猫だけで……。（泣く）

邦子たち、また始まったという感じで慰める。

邦子　由利江さんそんなことないわよ、みんなお友達じゃない。
陽子　だいたいこうなるのよ。
仁美・遙香　ああ……。
仁美　陽子さんもなにかご事情あるんですか。
陽子　ううん、あたし別にないのよ。亭主とは定年離婚してもう会いもしないけど親のほうのお墓には入れるし。結婚した娘がいるからお彼岸ぐらいにはおせんこ立てに来てくれると思うのよ。だけどなんだかねえ……そういうのって義理でしてくれるようなもんでしょう？お金もかかるし、うちのお墓遠いし。だからいっそ、コインロッカーみたいなお墓でもいいかなあと思ったんだけど、やっぱ

佐和子　り味気ないような気もしてねえ。
だから散骨がいいわよってあたし言ったの。うちの亭主がそうだったのよ。偏屈な学者でね、世間の常識なんて笑い飛ばすような人だったんだけど、死ぬ間際に言ったのよ。「俺はこの世ときれいにおさらばしたい。蔵書はぜんぶ売ってくれ。遺灰は海に撒いてくれ」。だからあたしそうしたわよ。千葉行って漁師さんに船だしてもらってね。いいなあと思ったわね、さっぱりして。執着がない感じがいいわよ。記憶に残ろうとか、名前を残そうとか。あたしも誰かに頼んでそうして貰おうかなあとは思ってたんだけど。

竹内　祥文さんなんかは、生きてるうちから執着ねえよな。

祥文　そう、俺はもう、いるだけ。

陽子　いるだけでいいのよ祥文さんは。いるだけでなんか和むんだから。

竹内　そこが人徳だよな。

祥文　でも、墓のこと考えると滅入っちゃうなあ。区役所がどうにかしてくれるだろうけどさ、何十年も付き合いのねえ親戚のとこ行ったって、そっちも困っちゃうだろうしなあ。

仁美　ああ、だから皆さん、それぞれのお墓のことを。由利江さんは海のそばとか陽子さんは牧場の近くとか。

邦子　それぞれじゃないのよ。いまのはみんな一緒の話。

仁美　え？

陽子　由利江さん慰めてるうちにね、みんなで一つのお墓に入ったら？って、そういう話になったのよ。

竹内　俺が言ったんだぜ。みんな墓に困ってんなら、お墓友達になろうって。略っして墓友だよ。

祥文　墓友かあ。

竹内　（ｉ―ＰＡＤを使いながら）これで調べたら、そういうのやってる人たち、もういるんだってさ。

由利江　どっかいい場所を決めましたらね、亡くなった方から順番に埋葬するんです。で、残ったものがお世話をするという、

祥文　あ、そりゃいいなあ、そりゃ助かるよ、俺も入れてくれんの？

竹内　もちろんだよ。

陽子　祥文さん、たぶん最初に埋まるわよ。

祥文　そうだよな。俺は108歳だからな。

みんな　ウソばっかり。

佐和子　で、どこをお墓にしようっかって、みんなでアイデア出し合ってたのよ。

由利江　やっぱり海のそばですよ。
祥文　海はいいなあ。
陽子　牧場もいいでしょ？
祥文　それも面白いよ。
竹内　俺は富士山のてっぺんがいいって言ったんだよ。
祥文　富士山はやめようよ、石ころだらけだぜ。
邦子　じゃあ尾瀬はどうかしら。水芭蕉がきれいよ。
陽子　尾瀬もいいわよねえ。
仁美　ちょっと待って。お母さんもノッちゃってるの？その「墓友」。
邦子　だってこういう話は楽しいわよ。八ツ墓村のこと考えるより。
佐和子　まだそんな具体的じゃないのよ。茶飲み話みたいなもん。娘さんが心配するのもわかるわよ。あたしたちと違って邦子さんにはご主人がいるんだから。
邦子　やだ、仲間外れにしないでよ。
陽子　しないわよ。ご主人がどう言っても、邦子さんのお墓は邦子さんのお墓。そういう考えもあるわ。それこそ課題の分離でしょ。
佐和子　ハハ、優秀な生徒だわね。
遙香　あの、私も仲間に入れるんでしょうか？
仁美　遙香。
遙香　だって心強いわよ。どうせあたし一人で死んでいくんだし、海のそばでも牧場でも皆さんが待っててくれると思うと。
仁美　あんたまだ38よ。
遙香　この先しあわせが訪れるとは思えない。
仁美　いまはそういう気分なのよ。
遙香　そうよ、自分で自分を埋めちゃいたいのよ。
陽子　でも若い人が一人いると安心ね。
竹内　そうだな、さすがに30年後はみんないねえもんな。
遙香　あたしまだ68ですよ。元気にお墓詣り行っちゃいますよ。
佐和子　じゃあ仮予約ってことで。
遥香　ありがとうございます。
お年寄りたち　よろしくお願いします。
仁美　ちょっと皆さんノリすぎですよ。
祥文　あ、ちょっと待って。えーと、1、2、3、4、5、6、7……7人だ。七人の墓友だ。
陽子　あら、かっこいいじゃない。

仁美を除く皆、笑う。音楽。
シルエットとなったベンチの人々は額を寄せ、楽しげな表情で墓の場所などについて話し合う。声は聞こえない。

仁美　話は妙な方向に進んだ。墓友の相談は、まだ冗談とも本気ともつかない。話し合う母たちは、気の置けない茶飲み仲間のようでもあり、家族よりも信頼しあう親友同士のようでもあった。遙香がノッたのはさすがに失恋した勢いだろう。明日になれば忘れてる。まだ３８だよ。そうあってほしい。

遙香、退場。

仁美　遙香のことを、あたしは偉そうに非難できない。同じ穴のむじな。いや、もっとタチが悪い。その恋に未来がないことを、あたしが受け入れてしまっているから。男にとっては都合がいい。あたしはそれすらも受け入れている。男は自分の卑怯さに気づかぬほど鈍感ではなく、心の痛みを隠しもしない。それを可愛いと思ってしまうのもまたやっかい。お互い痛い。痛がりながら、ここがドン詰まりのような、かえってサバサバ自由なような、不思議な安らぎを味わう。そう言えば、お年寄りたちがお墓の話をする時も、そこには不思議な安らぎがあった。

邦子たち、退場。明かりは仁美に絞られ。

仁美　男とは、いまどきまれな昭和風情のラブホテルで会う。それだけを目的につくられた部屋。丸いベッド。こんなわびしさが、あたしたちの恋には似合う。そううそぶくことも、遊びのうちだ。

【4場／ラブホテル】

ラブホテルの一室。ベッドにはスーツの背広を脱いだ三村正明。あぐらをかき、ネクタイを緩めながら。

三村　そりゃ面白いね。取材してみたら？

仁美　墓友のこと？

三村　これからそういう人はきっと増えるよ。もちろん一人暮らしのお年寄りが必要に迫られてってこともあるだろうけど、なにしろ一生独身でやつが増える。家という制度の問題もあるな。今までの墓はなになに家の墓というぐらいで、ありゃ家のもんだ。家への所属意識が薄まれば、当然、墓の在り方も変わってくるだろう。こないだ墓参りに行って驚いたことがあった。なになに家の墓にまじって、「愛」とか「ふれあい」とか「きずな」とか、歌の文句みたいなことが彫ってある墓石がずいぶんあったんだ。ありゃ故人の好きな言葉を書いたんだろう。家ではなく個人、あるいはここから新しい家族を始めるぞという意思表示だ。子供はどうするんだろうな。「ふれあい」なんて言葉が嫌いでも、その墓石の下に入るんだろうか。ハハ、いずれにしても面白いね。うまくすりゃ20ページぐらいの特集になる。広告の2番目には見出しを持ってきてもいいな。どうだい、やらないか？

仁美　やらない。このことにはライターとしてより、娘として関わらなきゃ。放っておけば父と母がますます危なっかしいことになりそう。

三村、背後から仁美の腕を取りベッドに転がす。

仁美　なによ。

三村　編集長の僕が書かせてやるって言ってるのに。

三村、仁美をワイルドに押し倒す。

仁美　やだやめてよ、まだ歯磨いてない。

だが仁美は接吻されるや、すぐぐったりしてしまう。とりあえず気がすんだ三村、

三村　その、すぐ反応してしまうところもいいね。
仁美　最低だと思ってんのよ、こんな関係。
三村　最低だね。
仁美　あなたもゲスだけどあたしもゲスよ。
三村　ああ、ゲス女！

ののしられた仁美、欲望に火が付き、二人笑っちゃうぐらい欲望をぶつけあう。（10秒ぐらいで充分ですけど）
そして三村は風呂につかったような快感と満足の声で、

三村　ああ……。

仁美はみっともなく泣く。三村はそんな仁美にお構いなしに、さばさばと、つまようじを使う時のような気分で。

三村　ぼかぁね、人生ってのは結局、セックスと飲み食いだと思うんだ。誰もが楽しみを味わえるのは結局その二つだろう。。出世や競争も面白いがしょせん大人のすごろくだ。ルールしだいだよ、かりそめなんだ。そこへいくと、飲み食いと抱き合う歓びは永遠だ。それさえありゃ生きてて良かったと思えるように神様は人間をおつくりになった。だから僕らは最低だけど、人生を楽しんでるほうだとも言えるよ。
仁美　言い訳の天才。
三村　時代遅れの雑誌の編集長でも僕は幸せだね。昔は文学を志したが今は金の苦労ばかりだ。女房・子供には生ゴミ扱いだ。それでも僕は幸せだね。いま死んでも悔いはないよ。（泣く）
仁美　……。

三村、子供のように仁美の膝で泣く。仁美、慣れた様子でさすってやる。と、仁美のケータイが鳴る。

仁美　あ、（ケータイを取って見る）
三村　無粋だね、出るなよ。
仁美　弟よ。
三村　ああ、ゲイを告白したアーチストか。

仁美　最初はびっくりしたけど三日もたったら慣れたわね。
三村　なんだって三日で慣れるよ。僕も化粧を落とした女房の顔に三日で慣れた。
仁美　（電話に出て）もしもし、

スマホを手にしたバスローブ姿の義明が現れる。どこか他の空間にいるという設定。

義明　ああ、出ないかと思ったよ。誰かといるの？
三村　（ふざけて）わんわん。
仁美　犬よ。
義明　ああ、彼氏と一緒か。いいじゃない。ハッピーで。
仁美　あんたはどこにいるのよ。
義明　大久保のラブホテルだよ。テルがそうしたいって言うから、なるべくレトロでキッチュなとこに入ったんだ。まさか姉さんも同じホテルじゃないだろうね。
仁美　ハハ、そんなわけないじゃない。
義明　壁たたいてみるよ。
仁美　たたいてみてよ。

義明、壁を叩く。

三村　こっちから聞こえたぞ。
仁美　！……何号室なの？
義明　（手にしたキーを見て）104。
三村　（ベッドにあったキーを見て）ここは103だ……！
義明　聞こえた？
仁美　ううん、全然聞こえない。
義明　だろうね。

と言いながら義明、ベッドに腰掛ける。仁美や三村と同じベッドだが、それぞれがいるのは104号室と103号室という設定である。三村は仁美のケータイに耳を近づけ義明の声を聞く。時折ふざけて仁美の膝を撫でたり。

仁美　テル君もいるの？

義明　いまシャワー浴びてる。綺麗好きだから時間がかかるんだ。ところでさ、聞いたよ、墓友の話。

仁美　え、お母さんと話したの？

義明　さっき電話がかかってきた。ファミレスで会ったんだろ？姉さんがあんまり賛成してくれなかったって心配してたよ。

仁美　いや賛成も反対も、あれはあの場でのお年寄りの思いつきみたいなもんなのよ。

義明　お母さんはそんな感じじゃなかったよ。姉さんと別れた後も盛りあがってもう一軒喫茶店いったんだって。遙香さんて姉さんの友達も一緒だったらしいよ。

仁美　（独言）あいつ本気かよ……。

義明　僕は面白いと思ったけどね、発想がラブ＆ピースだよ、気の合う友達が一緒のお墓入るなんてさ。そう言ったらお母さん喜んで、いろいろ相談されちゃってね、

仁美　ちょっとハッパかけないでよ。

義明　で、それ聞いてたテルが、じゃあ僕の実家に相談してみようかって言うんだよ。

仁美　え、何やってんのよテル君の実家。

義明　寺なんだよ。四谷の陽安寺っていう。

仁美　え、テル君てお寺の息子なの？

義明　そう。テルは次男なんだけどお兄さんも継ぐのいやがってうち出ちゃったんだ。そのあとお父さんは死んじゃったんだけどね、

仁美　じゃあお寺誰が継いだのよ。

義明　企業コンサルの会社にいた従兄弟の浩介さんて人が継いだんだよ。話しやすい人だから一緒に相談に行こうってことになったんだけど、（割り込みを知らせる音が鳴りケータイを見て）あ、お母さんからキャッチ入った。いったん切るよ。もしもしお母さん……。

と言いながら、義明、退場。

仁美　ちょっと義明、（電話はすでに切れている）

三村　ついて行ったほうがいいんじゃない？止めるにしても取材するにしても。

仁美　四谷の陽安寺なら知ってる。古くて小さなお寺なんだけど、一本だけある桜の木が春には見事なの。

三村　さて僕は風呂に入るよ。一緒に入らない？

仁美　いやよ。

三村　あ、そ！

三村、バスルームに向かい、立ち止まり、

三村　墓友か……。うらやましいね、そんな友達がいるのは。

三村、退場。

仁美　……待ってよ。やっぱりあたしも入りまちゅう。

音楽仁美、退場。暗転。（休憩へ）

【5場／陽安寺】

音楽。明かり入ると四谷の小さな寺、陽安寺の境内。翌日の午後である。雑巾を手に、作務衣姿の浩介が登場。ベンチを乾拭きする。と、ハンカチで手を拭きながら照之登場。

照之　浩介さん。

浩介　おうテル君、トイレきれいになったろ。

照之　自分の実家とは思えませんね。僕がニューヨークに行くまでずっと和式のボットン便所だったから。

浩介　この寺を継いで真っ先にしたことがボットン便所をシャワートイレにすることだったよ。枯れた味があっていい寺なんだが、こればっかりはなあ。

照之　浩介さんには感謝してますよ。僕も兄貴もほっぽりだした寺を継いでくれたんだから。

浩介　君より、君の兄貴より、僕は君のお父さんと仲が良かったからね。というか寺が好きだったんだな。中学のころなんか、同級生は松田聖子のファンだったけど。俺は弥勒菩薩のファンだったから。

照之　変わった子供だよね。

浩介　変ってんだよ俺は。寺も好きだけど経済も好きなんだ。金が好きってわけじゃなくて、世の中の動きを見るのが面白いんだ。企業コンサルタントとしてもなかなか優秀だったんだぜ。

照之　わかります、お喋りだし。

浩介　だから、君たちが出てっちゃって、この寺どうしようってお父さんに相談された時さ、僕継いでもいいですよ、その代わり好きにやらせてもらえますかって、そう言ってみたんだよ。

照之　そしたら？

浩介　檀家さえ大事にしてくりゃ好きにしていいって。お父さんもいろいろ考えてたんだよ。葬式だけの寺じゃつまらんなあって。仏教ってもんは心穏やかに暮らす知恵のかたまりだから、そういうことをもっと広めていけんかなあって。

照之　へえ、オヤジそんなこと考えてたんだ。

浩介　お父さん、落語が好きでよく聞いてたんだけどさ、長屋のご隠居ってのが出てくんだろ？熊さん八つぁんに困ったことがあると、ご隠居はなんでも相談にのっていい知恵だしてくれんだよ。俺もそ

ういう坊主になりてえなあ、なんて言ってたよ。
照之　いいこと言うなあ、生きてるうちにもっと話しておけばよかった。
浩介　そんなもんだよ、父親と息子は。こないだ、会社時代の友達に聞いたんだけどさ、
照之　ええ。
浩介　いまは十人に一人は鬱病になっちゃうんだって。
照之　へえ、そんなに。
浩介　無理が出てんだよ、競争社会や能力主義のさ。日本人に合わないんだよな、人を蹴落とすようなやり方は。（「チャンチキおけさ」の歌詞をくちずさみ）・・って、そういう国なんだから。
照之　アメリカじゃカウンセラーにかかる人多いですけどね。
浩介　だからそういう役目を坊主が果たせばいいんだよ。こういう時代は坊主が大活躍できると思うよ。
照之　なるほどね。
浩介　最近このへんに坊主バーっていうのができてさ、
照之　坊主バー。
浩介　京都から坊主が出張して来てバーテンみたいなことやってんだよ。屏風に上手に絵かいてる場合じゃないよ。バーで上手にカクテル作ってんだよ。
照之　へえ。
浩介　で、ＯＬさんが一杯飲みながら、恋の相談とかしてるらしいよ。
照之　新しいですねそれは。
浩介　世の中変われば坊主も変わるよ。寺の在り方も変わっていいし、そうなりゃお墓も変っていいんだよ。

と、様子を伺うように邦子登場。手土産が入った紙袋を持っている。

邦子　こんにちは。
照之　ああ、お母さんいらっしゃい。あ、義明君と会いませんでした？道わかりにくいからって駅まで迎えに行ったんですけど。
邦子　あら、どっかですれ違ったのかしら。
照之　じゃあメールしときます。あ、こちら義明君のおかあさん。こちら、従兄弟の浩介さんです。
浩介　これはようこそお越しくださいました。当寺の住職でございます。
邦子　このたびはなんですか急に、

浩介　いやなに、これも仏のご縁でございましょう。
照之　急にお坊さんぽくなりましたね。
浩介　俺なりに気をつけてんだよ。最初からくだけてると信用してもらえないからさ。
照之　こういう坊さんなんですよ。
邦子　かえっていいわよ、お話ししやすくて。あのこれ、つまらないものですが、
浩介　ああ、これはご丁寧に。なんでございましょう。
邦子　マカロンっていうんですけど。
照之　あ、これ知ってますよ。いま大人気ですよね。
浩介　これが？
邦子　そう。お土産何がいいかってみんなで話してね、お寺さんに和菓子じゃ食べ飽きてるでしょうし。
浩介　そうなんですよ、だいたい和菓子ですから。
邦子　で、竹内さんて人がインターネットで調べて。
浩介　そうですか、わざわざ……
照之　でもこれ行列しないと買えないんじゃないですか。
邦子　そうなのよ、だからじいさんばあさんで行列したの。
浩介　え、皆さんもご一緒なんですか。
邦子　呼んでよろしいですか。
浩介　ええ、どうぞ、どうぞ。
邦子　（上手前方袖に向かって）皆さん、いらしてー。

門の方から、竹内、祥文、陽子、由利江、佐和子がぞくぞくと登場。皆、マカロンの紙袋を持っている。

竹内　ああ、どうも、こんちは。
祥文　こんちは。
陽子　こんにちは。
由利江　こんにちは。
佐和子　こんにちは。
浩介　ああ、これはこんにちは。皆さんマカロンをお持ちになって。
陽子　せっかく行列したんでね、自分のぶんも買ったんですよ。
浩介　そうですか、いいですねお元気で。
佐和子　ですからね、元気なうちにお墓の話をと思って。
浩介　ハハ、うまいな。いや昨夜はこの従兄弟の照之君から、そして先ほ

どはこちらの息子さんの義明君から、皆さんのご計画はざっくりと伺いました。いやあ面白いですよ墓友というのは。実際そうした活動を組織としてなさってる皆さんもいらっしゃいます。私、見学に行ってお話を伺ったこともあるんですよ。

佐和子　ああ、そうですか。

竹内　頼もしいねえ。

浩介　で、うちの寺としてどんなご協力ができるか、ゆうべからいろいろ考えましてね。

邦子　聞かせてください。

浩介　では本堂でお話ししましょう。

祥文　あ、その前に便所は、

浩介　ああ、途中にありますよ。ほかにトイレに行かれる方は……。

由利江　念のためいっとこうかしら。お寺冷えるから。

陽子　そうねえ。

全員　私も。俺も。

浩介　いっときましょう、こちらです。

浩介、続いて陽子たち、お喋りしながら本堂の方へ退場。
最後尾にいた邦子が、

邦子　テル君、いろいろありがとね。

照之　ああ、いえいえ、

邦子　でもほんといい方ねえ。

照之　ハハ、うってつけでしたね。

邦子　テル君はお寺継ごうとは思わなかったの？

照之　いや、僕は次男だから。むしろ、飛び出したくてたまりませんでしたね。そういうとこは、義明君と似てるかな。

邦子　そう……。

照之　あ、義明君とのこと、ご家族をびっくりさせちゃって、そういう意味では、申し訳なく思ってます。

邦子　ふふ……そりゃびっくりしたわよ。でも親ってのはねえ、子供が誰を連れてきても受け入れるしかないの。それがたまたま男の子だったって言うだけで、

照之　でもその、「だけ」が大変ですよね。

邦子　大変よ。大変だけどしょうがないのよ。しょうがないんだったら、仲良くした方がいいじゃない。

照之　ああ、そう言って貰えるとちょっと安心します。お父さんはどうですか？
邦子　お父さんは駄目ね。記憶から抹殺したみたい。その話は一言も言わないもの。
照之　やっぱり。
邦子　まあ、時間が解決するんじゃないかしらね……。
照之　時間に期待します。
邦子　じゃ。
照之　はい。

邦子、退場。照之はメールを打つ。
と、仁美と義明が言い争いながら登場。義明は緑茶の２リットルボトルなどを入れたコンビニの袋を持っている。

義明　何がいけないんだよ、いいアイデアだよ、ご住職の浩介さんだってBrilliant!って言ってくれたよ。
仁美　お坊さんがBrilliant!は言わないでしょう。
義明　言いそうなお坊さんなんだよ、頭やわらかくて。なあ。
照之　何喧嘩してるの？
義明　ねえさん墓友のアイデアに反対でさ、お母さんたちを止めに来たんだよ。
仁美　違うわよ、あんまりはやまらないようにって話をしに来たのよ。
義明　おんなじことだよ。
照之　もう来てるよ、墓友の皆さんも一緒に。
義明　やっぱりね。どっかですれちがったんだ。
照之　いま浩介さんと本堂で話してる。
義明　みんなで飲めるように緑茶買ってきたよ。
照之　紅茶のほうが良かったかもしれないね。
義明　なんで？
照之　お母さんたち、お土産にマカロン買ってきたんだよ。
義明　え？まさかピエールの？
照之　そう。
義明　あそこ行列大変でしょう。
照之　並んで買ったんだって、じいさんばあさんで。
義明　へえ、頭やわらかいね墓友の人たちは。かたいのねえさんだけよ。オヤジの血を引いたんだね。

仁美　変なこと言わないでよ。あたしはね。お母さんたちの夫婦仲が、これ以上悪くなるんじゃないかって心配してんのよ。
義明　まあそれはわかるけどさ。
仁美　お母さん、勢いだと思うのよ。お友達と盛り上がっちゃって。それをまたあんたが、イキオイで賛成しちゃうから。
義明　イキオイじゃないよ、Happy な Concept だと思ったからさ。
仁美　なにが Happy よ。テル君と一緒にあんなお城みたいなラブホテルにいたからでしょう。
義明　え、なんで知ってんの？
仁美　だってゆうべあんた電話で言ったじゃない、いまテル君がシャワー浴びてて、
義明　いやいや、お城みたいって言ってない。
仁美　言ったでしょう、大久保のニューキャッスルって。
義明　いやいや、名前言ってない。
仁美　あ……そうだっけ……
義明　あれ？
照之　あれ？あれ？
義明　ひょっとして、あの時おんなじホテルにいたんじゃない？トントンしたとき聞こえてたんじゃないの？
仁美　あれー、記憶ない。
義明　なんだ。
照之　すごい偶然だね。
義明　そういうことなら僕らの部屋来ればよかったのに。そのミスターキャッスルと。
仁美　そんな趣味ないわよ。しかもゲイの弟のカップルと。
義明　そういうんじゃないよ、一緒に酒でも飲みたかったってことだよ。
照之　ハッピーだよね、そういうの。
義明　ハッピーだよ。
仁美　なんでもハッピーにしちゃうわね、あなたたちは。
義明　そりゃいっぱい悩んでるからね。たいていのことはたいしたことないように思えるんだ。
照之　Positive に考える癖はついてるよね。
仁美　そういうとこはうらやましいわよ。進化した人類よ。あたしなんかどっちかっていうと根が Negative だから……（と言いながら上手前方を向く）
義明　でも会いたかったよね、ねえさんのカレシ。

照之　会いたかったよね。
仁美　会えるわよ、しかも今。
義明・照之　え？

と、三村登場。

三村　やあ、来ちゃったよ気になって。君が取材しないなら僕がしようかと思ってさ。
義明　この人？ミスター
二人　キャッスル。
仁美　そう。
三村　こちらは？
仁美　弟の義明です。
三村　ああ、お噂は伺ってますよ。ということはそちらが……。
義明　パートナーのテルです。
三村　ああ、こりゃどうも。文芸世界という雑誌の編集長をやっております三村です。おねえさんにはいつもお世話になっておりまして。
義明　ゆうべもですよね。
三村　え？
仁美　バレちゃったのよ、隣にいたこと。
三村　アハ、そりゃきまりが悪いな。
義明　あの三村さん、
三村　はい。
義明　つかぬことを伺うんですが、ご結婚されてますよね。
仁美　ちょっと！
義明　だって指輪が見えちゃったんだよ。ねえさん不倫してるの？
三村　ハハ、単刀直入だね君の弟さんは。
義明　（照之に）不倫だって。ゲスだよね？
照之　ゲスの極みだよね。
仁美　あら？
義明　なに。
仁美　アーチストってこういう事には寛大なんじゃないの？愛と自由を求めてるんだから。
義明　やだな誤解しないでよ、常識には縛られないけどアンモラルを求めてるわけじゃないんだ。求めてるのはハッピーだよ。
仁美　あたしたちハッピーなのよ。

義明　アンハッピーだよ、誰にも祝福されないんだから。
仁美　お寺の境内でそんなこと言われたかないわよ。
照之　お寺だからいいんですよ。従兄弟に言わせれば仏様には裸の心で向き合うそうです。言いたいこと言い合えばいいんじゃないですか。
三村　裸の心ということで言えば僕も悩んではいるんですよ。
義明　それは希望です。このままじゃいけないと思ってるってことでしょう？
照之　離婚して仁美さんと一緒になるんですか。
仁美　それはないのよ。あたしがやなの。
義明　なんで。
仁美　家庭は壊したくないし、自立した女のプライドがあるし。
三村　僕はこういうおねえさんに甘えてるんですよ。
照之　わかってるじゃないですか。
三村　ダメなんです僕は。ときどきおねえさんの膝で泣くんです。
仁美　でもそこがまた可愛いのよ。
照之　うゎ、泥沼ですね。
三村　弟さん、僕をののしる気持ちはよくわかります。おねえさんを幸せにできないんですからね。だけどかと言って、女房を幸せにしてるわけでもないんですよ。なんなんでしょうね、僕って男は。どう思います？
義明・照之　ゲスだと思います。
三村　そうゲスよね。

と、遙香と剛が言い争いながら登場。

遙香　だから大丈夫よ、心配しないでよ。
剛　心配するよ。だってもしそんなことになったら。
遙香　そんなことしないって。
仁美　遙香、
遙香　ああ、仁美さんも墓友になることにしたの？
仁美　違うわよ、お母さんにブレーキかけようと思って。ていうかあんたたちまた付き合うことにしたの？
遙香　そうじゃないのよ、心配してくっついてきたの。あたしが自殺するんじゃないかって。
仁美　え？

義明　聞いててていいのかな。
仁美　ああ、紹介するわよ。弟の義明とパートナーのテル君。
義明・照之　こんにちは。
仁美　二人は付き合ってるの。
遙香・剛　（間）ああ。
仁美　ライター仲間の遙香とホストの剛くん。
遙香・剛　こんにちは。
仁美　きのう別れたばっかりなの。
義明・照之　（間）ああ。
仁美　（遙香に）三村さんは知ってるわよね。
遙香　編集長、ご無沙汰してます。
三村　久しぶりだね。
遙香　仁美さんから、いろいろ聞いてます。
三村　みんな知ってるね、僕らのことは。
仁美　で、なんなのよ自殺って。
剛　ゆうべ泣きながら電話かけてきたんすよ。
遙香　酔っぱらってたのよ。
仁美　泣きごと言ったの？
遙香　気持ちを歌に託したのよ。オフコースの「さよなら」を電話口で歌ったの。
仁美　キツイねそれ。
剛　俺、すげえ辛かったけど、ちゃんと受け止めようと思って最後まで聞いたんです。で……。
仁美　自殺するって？
剛　お墓の話ですよ。墓友になるとか、
仁美　ああ、
剛　まだ四十前なのにお墓のこと考えるなんて変じゃないですか。少なくとも生命力が弱ってるっつーか、
遙香　だからちがうのよ。一人で生きてくって決めたからよ。墓友になると思ったら、もうお墓の心配しなくていいの。家族もつくらなくていいし、子供も産まなくていいの。安心して一人で生きてくためよ。生命力が弱ってんじゃなくて、逆に、強くしようとしてんのよ。
剛　わからないっすよ、その理屈。
義明　僕はなんかわかるな。僕らだってなあ、子供はつくれないし。
照之　ちょっと無理だよね。
義明　ふつうの家族はもてないよ。僕らはそういう選択をしたんだ。

遙香　似てるかも。
仁美　だけど遙香はこれからまだ出会いがあると思うのよ。子供だって四十過ぎてつくる人いっぱいいるんだから。
義明　そういうのを未来に縛られるって言うんだよ。今そう思うならそうすればいい。ちがう未来が来たらその時変えればいんだから。
遙香　いいわあ、仁美さんの弟くん。
照之　僕のカレシです。
仁美　じゃあお母さんはどうよ。家族があるのよ。他の人と一緒のお墓なんかに入ることないじゃない。
義明　たぶん、家族と思えないんじゃないかな、僕らが。
仁美　そんな。
義明　ていうか、僕らを尊重してくれてるのかもしれない。あなたたちはあなたたちで好きにやりなさい。私も私でいくからって。
仁美　なんでそんなことになっちゃったのよ。
義明　結局は、オヤジのことだろうな。心が通じ合わない。僕らが寄り付かない。たぶん、長い時間をかけて、オヤジにも僕らにも期待しないって、そういう気持ちをつくってったんじゃないか。
仁美　もっと優しくしてあげよう、今からでも。
義明　口でどうなるもんでもないよ。気を遣わなくていいわよって、笑って言われちゃうよ。
仁美　どうすればいいのよ。
義明　僕はお母さんが決めることなら何でも賛成だよ。いまはオヤジや僕らより、墓友の人たちと心が通じ合ってる。それはハッピーなことだよ。常識を取っ払えば、僕らは誰とお墓に入ろうと自由なんだ。
遙香　でもその自由を使うためには強くなきゃいけないでしょ。
義明　そうだね、自分の生き方を決めなきゃいけない。
遙香　あたしはそうありたいの。もう男には振り回されない。
義明　きっとお母さんもそうだよ。もうオヤジには振り回されないぞって、サバサバした気持ちなんだ。

本堂の方からから陽子、浩介、佐和子、竹内、由利江、祥文、邦子が戻ってくる。
皆、目下の関心は桜の木である。

陽子　ああ、この桜の木ね。
浩介　そうです、このボロ寺で唯一の自慢ですよ。

佐和子　確かに立派ねえ、春には素晴らしいでしょうね。
浩介　毛虫もすごいですけどね。
邦子たち　（笑う）
遙香　こんにちは、遅くなってすみません。
邦子　あら来れたのね、よかったわ。
佐和子　若き墓友の遙香さんです。
浩介　ああ、伺ってますよ。
邦子　こちらご住職。
遙香　よろしくお願いします。
浩介　えーと、こちらの方々も、
遙香　あ、いえ、
剛　遙香さんの知り合いです。
三村　ちょっと見学させていただいてもよろしいでしょうか。
浩介　ええ、もちろんですよ。
陽子　仁美さんもこんにちは。
仁美　こんにちは。
邦子　あんたは何しに来たのよ。
仁美　遙香の付き添いよ。
竹内　監視に来たんじゃないの？お母さんが悪い仲間に引っ張り込まれないように。
仁美　ちがいますよ。
皆　（笑う）
遙香　桜の木のお話ですか。
浩介　ええ、樹木葬というのがあるんですよ。墓石ではなく木の下に眠る。
遙香　ああ、じゃあの桜の下に。
浩介　桜葬です。実際にもう、やってらっしゃる皆さんもいるんですよ。
三村　質問、いいですか。
浩介　どうぞ。
三村　埋葬する時は、いわゆるお骨ですよねえ。
浩介　ええ。
三村　墓友と言っても、みんないっぺんに死んじゃうわけじゃないですよね。
浩介　ええ、おそらく順番に。
祥文　俺が最初。
陽子　まだわかんないわよ。
三村　そうするとですね、そこに穴掘って、亡くなった人から順番にザラ

浩介　ザラっと、
三村　いえいえ、そこは基本、一人一穴なんですよ。
浩介　一人一穴。
　　ええ、いまやってらっしゃる皆さんのやり方で言いますと、このぐらいの筒を地面に埋めましてそこに一人ずつ、
皆　　ああ……。
三村　でも墓石は立てないわけですよね、誰がどこいったかわかんなくなっちゃいません？
浩介　だいじょぶなんですそこは。たとえばですね、七つなら七つ筒を埋めますよね、で、だいだいどのへんに誰が埋まってるかという看板をつくっておくわけです。
三村　あ、なるほど。じゃあお参りに来た時は、それ見て、ああのへんだと思ってそこめがけて、
浩介　そういうことです。
由利江　あ、じゃああたくしは、なるべく木から離れたところがいいんですわ。毛虫が落ちてきますから。
竹内　俺はなるべく近い方がいいな。その方が特等席って感じがするよ。
佐和子　ハハ、まだ気が早いわよ。ご住職がご提案くださったことを、あたしたちで相談しなきゃ。どうなの？この桜の木の下で眠るってこと。
陽子　あたしはいいと思う。牧場撤回。桜ってとこがいいわよ。春になったら花弁が降り注ぐんでしょう。
祥文　成仏できそうだな。
由利江　海よりいいですよ、温かい感じがして。
邦子　一人ずつ、ちょっと離れてって言うのもいいわね。
佐和子　つかず離れずって感じでね。
邦子　一人は一人なのよ。でもすぐそばにお友達がいるの。
竹内　いいね、ファミレスの俺たちそのまんまだ。
邦子たち　（笑う）
佐和子　遙香さんは？
遙香　すいません。あたしは、保留にさせてください。ここなんだと思ったら、なんか生々しくなってきちゃって。
佐和子　そうね。あなたはまだ先でいいわね。でもあたしたちには現実。不安で怖い。だから、友達が必要なの。

音楽。墓友たち、桜の木、そして仲間たちを見る。そんな

人々を浩介は優しい気持ちで見る。遙香は自分の未来を考え始めた。そんな遙香を剛が見る。三村は自分の人生はなんなのだろうと思い返しているようだ。義明と照之はおそらくお互いが墓友になるのであろうという思いでいる。仁美は桜を見る邦子を見ている。その心を探っている。そして自分の心も。

暗転。

【6場／吉野家の庭】

明かり入る。吉野家の庭。風の音。夜である。
母屋のほうから缶ビールを持った義和、追って栗原が登場。

栗原　おい、義和君、落ち着けよ。君まで怒っちゃったら揉めるばっかりだよ。
義和　お母さんには驚きましたよ、僕らを集めて何を言い出すかと思ったら。墓には、その墓友とか言う知らない人と一緒に入るなんて。
栗原　知らない人じゃないよ。朗読の仲間だって言ってたよ。あとはファミレスのお友達とか。
義和　知らない人も同然ですよ。少なくとも僕は知らない人です。
栗原　だから紹介するって言ってたじゃないか。仁美ちゃんと義明君はもう会ったから、こんどはお父さんと君に。
義和　紹介されても困りますよ。オヤジが怒るのも無理ないです。
栗原　あいつが怒るとほんとに真っ赤になるなあ、ゆでダコみたいだ。
義和　栗原さんはなんですか。お母さんの味方なんですか。
栗原　いや、味方ってこともないんだけどさ……ちょっとビールくれよ。
義和　取りに行けばいいじゃないですか。
栗原　やだよ、ゆでダコがいるから。
義和　ちょっとですよ。
栗原　（ビールを一口飲む）なんていうかなあ、邦ちゃんの気持ちがわからんでもないと言うか
義和　その、墓友ってやつですか？
栗原　いや、もっと手前の、オヤジと一緒の墓には入りたくないと言う、ああ。
義和　こないだのバーベキューで邦ちゃんが言ったとき、実は俺、ちょっとドキッとしたんだよ。うちの女房がこう言いだしたらどうしようって。
栗原　だけど栗原さんのとこは仲いいでしょう？
義和　おう、去年なんか熱海と伊豆と、二人で二回も旅行に行ったんだ。
栗原　立派ですよ。
義和　偉いだろう？俺、頑張ってるよ。自分を褒めてやりたいよ。でもその、頑張ってるってとこが駄目な気もするんだよ。ノルマ果たして

義和　るみたいだろ？（ビールを飲む）
栗原　果たしてない人もいっぱいいますよ。
旅行から帰ってくるとホッとするんだ。たぶん女房もそうだろう。
何年連れ添っても気持ちがわからん。或る日突然、邦ちゃんみたいなこと言ってもおかしくないよ。（ビールを飲む）
義和　だいじょぶですよ。だけどそれ……（ビール飲みすぎ、と言いたいのだが）
栗原　小津安二郎の映画に出てくるだろう、空を眺めて、大したことも喋らないで、心が通じてるような夫婦がさ。ああいう夫婦に憧れたんだが、なかなかなれないよ。（ビールを飲みきって）プハーッ。
義和　（空きカンを受け取って）全部飲んじゃったんですか！？
栗原　うまいなビールは。いつもは発泡酒だから。
義和　まいったなあ。

母屋のほうから財布を手に美枝子登場。

美枝子　あなた、買い物行くけど何か買ってくる？
義和　あ、じゃあビール買ってきてくれよ。
栗原　どうせなら高いやつ。
義和　エビス２本。
美枝子　わかった。
栗原　あと何買うんだい。
美枝子　何か甘いもの。大福がいいかな。そこの和菓子屋さん８時までやってるんですよ。
栗原　おい、大福じゃ飲めないぜ。
義和　ピーナッツにしてくれよ。
美枝子　駄目よ、お年寄りは噛めないから。お酒飲めない人もいるみたいだし。
栗原　どういうこと？
美枝子　これから来るかもしれないんですよ、お母さんのお友達。
義和　え、その墓友って人たちか？
美枝子　そう、駅前のドトールでスタンバってるんだって。
義和　なんだよ、お袋、ハナからそのつもりだったのか。友達つれてきてオヤジを説得しようって。
美枝子　そうじゃないのよ。お母さんとしては、お父さんに納得してもらった上で紹介するつもりだったんだって。だけどお義父さんがあの

調子でしょう？
栗原　タコになっちゃったからな。
美枝子　お義父さんがトイレに立ったすきに。仁美さんと義明さんに相談したのよ。いまドトールにいるんだけどどうしようって。
義和　そりゃ帰って貰ったほうがいいよ。オヤジがますますタコになるだけだよ。

と、母屋のほうから義明と仁美が喋りながら登場。

義明　いや、会って貰ったほうがいいよ。とってもいい人たちだから、お父さんも会えば安心するんじゃないかな。
仁美　そういう問題じゃないのよ。前提自体に納得してないわけだから。
義和　いま聞いたよ、俺も反対。
仁美　そうでしょう？話には順番があると思うのよ。（義明に）ここはもっと時間をかけて、
義和　そうじゃないよ。俺はおおもとから反対なんだ。おかしいよ。他人と一緒に入る墓なんて。
義明　一緒ってわけじゃないよ。穴は一人ずつ別なんだ。
仁美　それが桜の下にズラッと並ぶの。
義明　ボコボコボコって、このぐらいのやつ。
仁美　あくまで一人用なのよ。お母さんのためのお母さんのお墓。
義明　だけどすぐそばに友達がいるってことだよ。個人は尊重するけどゆるやかにつながってる感じだね。それが桜の下なんだ。自然と一体になる。美しいよね。Love&Peace だよ。
義和　何を言ってるんだよ。芸術作品じゃないんだぞ。仁美も賛成なのか。
仁美　正直言ってあたしは複雑。今日もみんなが集められて、この話になるのはわかってたけど、内心はお母さん早まらないでって思ってて。こういうお墓があってもいいとは思うのよ。だけどお母さんが入るべきかはわからない。というより、一番の問題はそう思ったお母さんの気持ちで。
義和　なんだよ気持ちって。
義明　お墓を別にしたいってことだよ。バーベキューの時は兄さんも褒めてたじゃないか。お母さんにしてはよく言ったって。
義和　あの時はもののたとえだと思ったんだよ。実際となると話は別だ。だいたい墓ってのは死んだあとの家みたいなもんだろう。家族と入るのが自然だよ。（美枝子に）なあ。

美枝子　どうかな。お義母さんみたいな考えがあってもいいと思うけど。
義和　え？
美枝子　三十年後、あたしがどう思ってるかって想像すると……。
栗原　きたきたきたきた……。
義和　おい、俺とお前はうまくいってるよな。
美枝子　……どうかな。
栗原　ほらほらほらほら。
義和　嬉しそうにしないでくださいよ！
栗原　だから言ったろ。女房の気持ちはわからないって。
義和　（美枝子に）俺はいい亭主だろ。オヤジみたいに横暴じゃないし。お義父さんのことも大事にするし。
美枝子　それはすごく感謝してるわよ。でも、あたしより大事なのかなって思う時がある。
義和　え。
美枝子　永福町に越すことだって、あなたのほうが積極的だった。むしろあたしが気をつかったわ。あなたは長男なんだからご両親とこっちに住まなくていいの？って。だけどあなたはあんなオヤジと住めないよって強引だったから、それじゃ角が立つと思って、こちらのご両親には、あたしのたってのお願いみたいに話して……。
義和　いや、だけど実際、丸山さんは一人身で不便だし。
美枝子　いまでも、丸山さんて呼ぶのよね。
義和　え？
美枝子　いまだに上司と部下なのよ。あたしは尊敬する上司のお嬢さん。あたしより、父と結婚したんじゃないかって思う時がある。
義和　おい、馬鹿なこと言うな。初めて紹介された時から俺はお前を、
美枝子　じゃあ父の娘じゃなかったらあたしと結婚した？
義和　……。
美枝子　ときどき心配になるの。父がいなくなっても、あたしとあなたは夫婦でいられるのかって。
義和　だいじょうぶだよ。そうなっても和彦がいるし。
美枝子　……ちがうでしょ！……大福買ってくる。

美枝子、足早に裏口のほうへ退場。

義和　……マズイこと言ったか。
仁美・義明　言った。

仁美　あれじゃ美枝子さんの心配に拍車かけるようなもんじゃない。
義和　うちやばいのかな。
仁美・義明　やばいよ。
仁美　ここんちの夫婦に匹敵するぐらい。
栗原　ほらほらほらほら。
義明　定年離婚どころじゃないね。丸山さんのお葬式の日に離婚を言い渡されるかも。
仁美　新しいわね。葬式離婚。
義和　なにみんな面白がってるんだよ。
義明　ドトール行ってくる。
仁美　事情はちゃんと説明してよ。もし来ることになってもいやな思いはさせたくないから。
義明　わかってる。

義明、裏口のほうへ退場。

義和　離婚なんて冗談じゃないよ。そんなことしたら丸山さんを悲しませる。
栗原　君、よっぽど重症だな。美枝子さんが言ったことは遠からずだろう。
義和　女房は大切にしてますよ。誕生日にはプレゼントを買うし、結婚記念日には食事に行くし。
栗原　俺と同じだよ。ノルマを果たしてる。
仁美　離婚もありかもね……
義和　え？
仁美　お母さんよ。いままでそれだけはって思ってたけど、ここまでくると。
義和　おい物騒なこと言うなよ。
仁美　墓友の中に定年離婚した人がいるのよ。事情はよく知らないけど、ともかくいまはさっぱりした顔していきいきしてるの。お母さんもそうしたらどうかなあ。お父さんから自由になるなら、生きてるうちのほうがいいんじゃないかな。
栗原　齢とってからの離婚で悲惨なのは男のほうだよ。特にあいつは邦ちゃんがいないと何もできないし。
仁美　犠牲になることないんじゃない？やっぱお母さんの人生なんだから。

母屋の方からケータイを手に邦子が登場。

邦子　義明、もういっちゃった？
義和　ああ、行ったみたいだよドトール。
邦子　あの子、気が早いんだから。メールして帰ってもらおうかしら。
義和　もういいんじゃない？来るなら来るで。喧嘩するならとことんやっちゃいなよ。
栗原　おい開き直ったねえ。
義和　夫婦の一言は怖いですね。その一言で、いままでそう思ってたのかとやっと気づく。そうなったらもう、それまでと同じ夫婦じゃいられなくなりますよ。
邦子　お母さんだってそうだ。バーベキューの時はいい啖呵だと思って面白がれたけど、ここまで具体的になるとシャレにならない。これからは顔を合わせるのも気まずいでしょう。そうなると仁美が言うことも一理あるな。お互いの心の平安を考えたら。
仁美　あんたなんて言ったの？
邦子　いや、つまりね、自由になるなら生きてるうちにって言うか、いっそ離婚して別々に暮らす道も、
仁美　それはしないのよ。
邦子　なんで？
仁美　だってあの人、あたしがいないとなんにもできないもの。
邦子　犠牲になることないのよ。
栗原　あいつへの情かね。
仁美　情もあるけど、責任感かしらね。それはもうずいぶん前に決めたのよ。どんなに手がかかろうと、いやな思いをしようと、お父さんの面倒を見るのがあたしの仕事。最後までまっとうしようと思って。
邦子　なにそれ、プロジェクトXみたいじゃない。
栗原　ハハ、そうね、お父さんの面倒を見るプロジェクトX。
邦子　プロジェクトが終われば仕事を離れて気の合う仲間と眠りたい、そういうことか墓友は。
義和　あら、かっこいわねそういうと。ふふ
邦子　そういうことなら、いっそ最後まで口に出さないって手もあったんじゃないか？オヤジへの不満も墓友の話も。平均寿命で言えば、9割がたオヤジのほうが先に逝くんだから、口では岡山に入ると言っておいて、オヤジが逝っちゃったらあとはお母さんの好きなように。

邦子　それはいやなのよ。
義和　なんで。
邦子　だって卑怯じゃない。はいはいって言いながらも、あたしは心の中でずっとお父さんと戦ってきたのよ。最後の最後でけたぐりみたいなことしたくないわ。だいじなことだから押し相撲でいきたい。がっぷり四つに組みたいのよ。
仁美　お相撲したら勝てる？
邦子　勝てるわよ。毎日スクワットしてるし。
栗原　あいつは？いまどうしてる？
邦子　黙りこくってずーっと飲んでる。ウイスキーをストレートで。
仁美　え、ウイスキー？
義和　それまずい。
栗原　昔っからそうなんだよ。あいつがウイスキーに手を出すともう手がつけられなくなって、

と、母屋のほうからウイスキーの瓶を手に甚べえ姿の義男登場。

義男　おい栗原！
栗原　はい！
義男　飲もう。サントリーオールドだ。昔は憧れの酒だったよ。部長になってやっと飲めたんだ。
栗原　ウイスキーはいいよ、俺はビールの方が。
義男　俺の酒が飲めんのか！
仁美　ちょっとお父さん、
義男　俺はな、女房にも一緒に墓に入って貰えない男なんだ。
栗原　吉野、落ち着け。いま邦ちゃんの気持ちは聞いたよ。俺なりには納得するとこもあった。だからお前も、
義男　いいから飲めよ。
栗原　じゃ一口。（瓶からじか飲み）
仁美　お母さん何してんの。
邦子　（大急ぎでケータイメールを打ちながら）メールよ。いま来ちゃ絶対まずいでしょう。
栗原　つまりだからな、夫婦で落ち着いて話すことが大事なんだよ。今日はもう酔っちゃったあしたまた改めて……。
義男　もんげえやっちもねえちばけんなあんごー！（すごくくだらない

ふざけんな馬鹿ー、の意）

義男、おもむろに物置の方に走り去る。

仁美　お父さん！

義和　なんて言ったんだあれ。

邦子　岡山弁よ、あたしもよくわかんない。

栗原　もんげえ？やっちも……。

仁美　ふんがーって……。

義和　あんごーじゃないか。

栗原　何やってんだ、あっち物置だろ。

義男が桃太郎の骨壺を持って登場。

義男　ちばけんな、あんごー！

邦子　お父さん！何よそれ、桃太郎の、

義男　お前が入らないなら、こいつと一緒に入るじゃがー（母屋の方へ行こうとする）

栗原　おい、どうすんだよ、犬のお骨を。

義男　いっしょにオールド飲むじゃがー。

義和　飲まないよ、犬だろ、しかもお骨だろ。

栗原　こらよこせ、それを。（骨壺を奪おうとする）

義男　やじゃがー。（抱え込む）

義和　お父さん、こら、手を離せよ。

栗原　こら、離せ、こら。

義和、骨壺を奪い仁美に渡し、

義和　ほら、しまっちゃえ。

仁美　うん。

仁美、骨壺を持って物置の方へ走り去る。

義男　こら、持ってくなー。

義男、義和と栗原を振りほどき、物置の方へ行こうとする

が、邦子が受け止めあっさりぶん投げる。

義男　あー（よろけて地べたに手をつく）
義和　お母さん、さすがだ。
邦子　（四股を踏む）
義男　わーん。（泣く）もんげえやっちもねえちばけんなあんごー！
栗原　……吉野すまん。標準語で言ってくれ。
義男　くだらん、ふざけんな、ばかやろー！
栗原　わかった。泣いてよし。
義男　わーん。（泣く）

泣きながら地面に座ってしまった義男を、義和、立たせ、ベンチに座らせる。この間に仁美も戻ってくる。義明と買い物帰りの美枝子も。

仁美　義明、墓友の人たちは？
義明　今日は帰るって。そのほうが良かったみたいだね。
邦子　（うなずく）
義和　ほら、汚れるよ。座ろうよ、子供じゃないんだから。
義男　俺の気持ちがわかるか。
義和　悔しいんだろ、お母さんに冷たくされたと思って。
義男　何十年夫婦をやってきたと思うんだ。
邦子　長さじゃないのよ。
義男　じゃあなんだ。俺は査定もよかったぞ。
邦子　そんなんじゃないのよ。
義男　働いたよ。お前と子供たちのためだ。男に、ほかに何ができるんだ。
皆　……。
義男　齢をとったら褒美が出るはずだ。よく働いた褒美だよ。子供たちが孫を連れて集まってくるんだ。田舎じゃみんなそうなんだ。それをなんだ。息子は永福町へ行っちまう。娘は嫁にも行かん。下の息子は男とくっついちまった。そのうえ邦子まで……じゃ俺はなんじゃ。悔しいんじゃっ。
仁美　……お父さん、悔しいのはわかったからさ、思う存分悔しがったら、そのあとでお母さんの気持ちを考えてあげてよ。お母さんはがっぷり四つに組みたがってるの。そうでなかったら墓友の話もお父さんにしないよ。ちゃんと受け止めてあげてよ。そしてこたえてあ

げてよ。つまり、お墓のことを考えることで、これからの夫婦のことを考えるっていうか、
ちばけんな！邦子は俺と一緒に岡山の墓に入るんだ。そうでなきゃ俺たちはなんだったんだ！

義男、母屋のほうへ行こうとする。

美枝子　お義父さん！
義男　（立ち止まる）はい。
美枝子　怒鳴ったら思考停止です。
義和　美枝子……。
美枝子　あたし、大福買いながらずっと考えてたのよ。変なこと言っちゃったって。あんなこと言わなきゃ良かったかもしれないって。でももう言っちゃった。お釣り貰う時には、言っちゃって良かったと思うことにした。ともかくあたしは、あなたに気持ちを伝えた。これからのことを考えるとそれで良かったって。
義和　……。
美枝子　お義母さんもきっとそう。岡山のお墓に入りたくないことも、墓友のことも、ぜんぶ言っちゃってよかった。（義男に）これからです。あたしたちもお義父さんたちも、これからです。
義男　……。

義男、母屋のほうへ去る。

栗原　おい、もう飲むなよ。（義和に）めざそうぜ、小津安二郎を。俺、見てくる。

栗原、義和の肩をポンと叩き、母屋のほうへ去る。

義和　……義明、コーヒーでも入れるか。
義明　話さなくていいの？かっこいい奥さんと。
義和　あとでゆっくりな。
美枝子　……。

義和、義明、母屋の方へ去る。

邦子　ありがとうね、仁美も、美枝子さんも。
美枝子　すいません、出過ぎたことして。
邦子　いいのよ、嬉しかった。
仁美　あたしが言うより効いたかも。
美枝子　あ、これどうしましょう、大福。
仁美　あ、ここで食べようか。
邦子　そうね、女同士で。

音楽。美枝子、ベンチで大福を取り出す。ビールと一緒に買ってきたペットボトルのお茶もある。三人、楽しげに大福の包みをあける。暗転。

【7場／ファミレス】

明かり入る。午後のファミレス。待合ベンチに佐和子、陽子、由利江が座っている。
由利江は文庫本、松本清張「黒革の手帖」の一節を朗読している。

由利江　わたしの問題の処理にあんまりぐずぐずしていると、国税局や警察の耳に入るんじゃないでしょうか。わたしはかまいませんがね。ただそうなると、この銀行がたいへん迷惑をうけると思いますよ。わたしの持っている黒革の手帳が国税局か警察に押収されることになりますからね。イヤでもわたしは一切を説明しなければならなくなりましょう。

陽子　由利江さん上手よ。悪女がぴったりよ。

由利江　そうかしら？

佐和子　米倉涼子より迫力あるんじゃないかしらね、年季が入ってるぶん。

陽子　実際にはどうだったのよ。ホステスやってらした時は男をだまくらかしたの？

由利江　あたくしが騙すと言うより、男が勝手に騙されるんですよ。

佐和子　……なんか深そうなお話ね。

由利江　きれいな服を着て、香水つけて、思いつきのようなことを脈絡なく言えばいいんです。お客様がお仕事の話をされてましてもね、退屈そうにひじをついて「あたし、猫が好き」とこういうふうに。

二人　ああ……

由利江　そうすると、媚を売らない不思議な女だなと、あちらが勝手に思ってくださいます。どんないい部屋でどんないいものを食ってるんだろうって、勝手に想像をめぐらしてくれるんです。ほんとうは六畳一間でカップ麺をすすっていてもですよ。

陽子　なるほど。

由利江　そうなればあとは簡単。銀座を歩いていて、このバッグ素敵と呟けば買ってくださいます。弟が病気なの、と呟けばお金を貸してくださいます。借りても返したことはございませんけど。

佐和子　陽子さん、ちょっとやってごらんなさいよ。

陽子　「あたし、猫が好き」。

佐和子　野良猫しか寄ってこないわね。

陽子　ハハハハ
由利江　いまはあたくしもですわ。
陽子・佐和子　……（内心ちょっと困ってる）
由利江　種を知ってる手品師は淋しいものですわ。長いことホステスをやるとよくわかります。この世界に不思議なことなどございません。ただの欲のぶつかり合いです。あたくし、いくつか宗教にハマったこともございまして、いまでは天国も地獄も信じておりません。人はただ、なくなってしまうのでしょう……でもいまは皆さんのおかげで落ち着いておりますの。朗読のお仲間にも入れていただいて、やりがいを感じています。誰かの役に立つというのはいいものですね。その気持ちさえあれば、明るく生きていけるのだと知りました。
佐和子　よかったわよ、そう言って貰えたら。
陽子　いまや期待のホープだもんね。
佐和子　そうよ、松本清張、どんどん読んでよ。
由利江　はい、がんばります。

トイレのほうから竹内と祥文が登場。祥文はハンカチで手を拭きながら。

竹内　ほら、だいじょぶかい。
祥文　だいじょぶだよ。
陽子　長かったわね、ひっくり返ったんじゃないかって心配してたわよ。
佐和子　祥文さん、もう気分はいいの？
竹内　ハハ、もう気分は良くなったんだけどさ、小便が長いんだよ。
祥文　ハハハハ。
竹内　もう終わったかと思うとさ、いやまだだって言って便器の前離れないんだよ。
陽子　ああ、ハハ。
由利江　しょうがありませんよ年をとれば。あたくしも尿モレパンツをしておりますの。
陽子　あら由利江さんも？あたしもよ。
佐和子　あたしもよ。
竹内　俺もだよ。
佐和子　仲間じゃない。
皆　ハイタッチ。（とハイタッチをする）

祥文　俺もだ。
皆　ハイタッチ。
竹内　最近はいいのが出てるから助かるよ。
陽子　吸水力がポイントよね。
由利江　履き心地も大切ですよ。
佐和子　しかしいいわね墓友は。もうなんでもぶっちゃけられるもんね。
陽子　ほんとよねえ。あの桜の下でみんな一緒に土になると思ったら、かっこつけててもしょうがないもんね。
佐和子　さっき由利江さんはさ、天国も地獄もないって言ったけど、そのへんぶっちゃけどう思う？
陽子　うーん、あたしもそうは思うんだけど、あると思ったほうが楽しいわね天国は。
竹内　俺もそうだな。なんか温泉みたいなとこにみんながつかってさ、のんびりしてるイメージなんだけどな。
佐和子　ハハ、いいわねそうだったら。
竹内　祥文さんはどう思うんだよ。
祥文　いやあ、いろいろ考えたんだけどさ、結局は、寝て起きねえってことじゃねえかなあ。
四人　ああ……。
陽子　リアルねそれ
由利江　リアルですわね。
祥文　だけど、こうも言えんだよ。俺たちは生きてる間もさ、一日一回は死んでるってことだよ。
佐和子　ああ、毎日寝るからね。
祥文　こないだ勘定したら俺はもう2万9千回ぐらい死んでんだよ。
四人　ああ……
祥文　そう思うとさ、別にどうってことないかなって気がすんだよな。
陽子　その最後の一回ってことだからね。
祥文　そう最終回スペシャルだな。「
皆　ハハハ。
竹内　なんか死ぬの楽しくなってきちゃったな。
佐和子　ねえ。
由利江　でも遙香さんは惜しかったですわねえ。若い方もいらっしゃればもっと楽しかったのに。
祥文　六人になっちゃったもんな。
陽子　五人になるかもしれないわよ。

祥文　え？
陽子　あたし、邦子さんはわかんないと思ってんのよ。
竹内　ああ、まだご主人と揉めてんだろ。
由利江　あたくしたちよりは恵まれてらっしゃいますもんね。
佐和子　まあ、そこは邦子さんの気持ちよ。最終回スペシャルまで、私たちは生きていく。生きるってことは、気持ちも事情も変わる可能性があるってことよ。ここまで生きてくりゃ、みんなもよく知ってるでしょう？何一つ確かなことなんてなかった。お互いそれをぜんぶ受け入れていきましょう。それが墓友。
由利江　いいですわね、風通しがよくて。

客席のほうから聖子が現れる。

聖子　すみません、もうちょっとお待ちください。いま片付けてますので。
佐和子　ああ、いいわよ。ゆっくりやって。
聖子　すぐすみますから。

聖子、客席の方へ退場。

陽子　ちょっと若いけど……遙香さんの代わりに、あの子どうかしら？
竹内　駄目だよ、遙香ちゃんは失恋して落ち込んでたけどさ、あの子はいまラブラブだろ？遙香ちゃんの元カレのホスト君と。
陽子　それがもう終わったのよ。
佐和子　え、それ知らない。
陽子　きのうドリンクバーでお喋りして聞いたんだけどさ、ホスト君がまた遙香ちゃんになびいたって言うのよ。
竹内　え、なんでだよ。
陽子　みんなで初めてお寺に行った日、遙香ちゃんがなんかかっこいいこと言ったらしいのよ。「自由を使うためには強くなきゃいけない。あたしはそうありたい」とかなんとかね。
佐和子　歌の歌詞みたいなこと言うわねあの子。
陽子　それに惚れ直しちゃったんだってホスト君。
由利江　じゃあいま傷心ですわね。
竹内　可能性はあるな。
陽子　あの子を引きずりこめば、あと五十年は安泰よ。お墓詣りして貰えるわよ。

佐和子　あとでアプローチしましょう。
陽子・由利江・竹内　うっしっし～

客席のほうから聖子が現れ、

聖子　お待たせしました。ご案内します。
四人　はーい！

皆、立つが、祥文は動こうとしない。

竹内　ほら祥文さん、席空いたってよ。
祥文　俺、便所。
竹内　またかよ。
祥文　むこう行くと遠くなっちゃうからもう一回いっとくよ。
竹内　そうかい。
佐和子　じゃ先行ってるわよ。
祥文　おう。
聖子　どうぞ。

聖子につづいて、墓友四人、客席の方へ退場。

祥文　うーん……。あれ。

祥文、何か体に異変を感じているようだ。トイレに行こうとして立ち上がろうするが、立てず、尻餅をつくようにベンチに座ってしまう。祥文にスポット。

祥文　……ハハ……ハハ……おい、まだ早いよ、最終回スペシャルは……。

音楽。祥文のシルエットがうずくまる。暗転。

【8場／陽安寺】

明かり入る。陽安寺の境内。春の午前。桜が咲いている。ベンチには祥文の自画像が立てかけれられている。破天荒なゴッホ風である。
本堂のほうから喪服姿の遙香がやってきて、やわらかい布で、自画像の額縁を拭く。額縁には桜の花びらが一枚ついている。それを取り、ポケットにしまう。拭き終わり、自画像と満開の桜を見比べる。本堂のほうから邦子登場。

邦子　遙香さん。
遙香　ああ、お母さん。
邦子　ありがとね、お手伝いに来てくれて。
遙香　当然ですよ、元メンバーですから。
邦子　これいい絵でしょう。ちょっとヘンテコリンだけど。
遙香　ええ、ここに置いてあると祥文さんが桜見てるみたい。自画像なんでしょう。
邦子　そう。若い頃は芸術青年だったらしいわよ。高校で美術の先生をしてたこともあるんだって。
遙香　へえ。
邦子　自分のことは言わない人だったから、あたしたちも知らなかったんだけどね、倒れて入院してから、少しずつ話してくれたのよ。学校は校長先生と喧嘩してやめたんだって。
遙香　へえ。
邦子　それからはペンキ屋さんになったり、芸術家の集まるバーでバーテンさんしたり、銭湯で富士山の絵を描いたこともあるらしいわよ。
遙香　波瀾万丈ですね。
邦子　最後に話したのは雪の日だったわ。雪だるまつくりてえなあ。くまモンがいいかなあ。
遙香　ハハハ。
邦子　亡くなったのはその翌日。あたしたちが駆けつけたら、楽しい夢でも見てるような、いい顔してた。それ見て竹内さんがね、
遙香　ええ。
邦子　祥文さん、風呂にでも浸かってるような顔してるぜ。やっぱり天国

遙香　はあるんじゃねえのかって。
邦子　きっとありますよ。祥文さん、露天風呂につかって桜見てますよ。
遙香　だといいけど、熱湯で熱がってたり。
　　ハハハ。アチチっつって。

本堂の方から剛が現れる。剛なりのオシャレな葬礼の服装。

剛　遙香さん、お茶のおかわり、ほうじ茶でもいいのかな。
遙香　え、緑茶あったでしょう。あたしさっき入れたわよ。
剛　ないんだよ、戸棚ぜんぶあけたけど。
遙香　戸棚じゃないわよ、あたしさっき使ってそのままテーブルに置いたんだから。
剛　あれ、あったっけ。
遙香　駄目よ、お寺の戸棚勝手にあけちゃ。いいわよ、あたしやるわよ。
邦子　悪いわね、剛君にも手伝わせちゃって。
遙香　いえ、いい機会なんですよ。いままっとうな人間になる修行中なんで。
剛　きついんすよこの人。
遙香　前は振り回されたから、こんどは振り回してやろうと思って。ほら行くよ。
剛　はい。

遙香、剛、本堂のほうへ退場。邦子、おかしそうに笑う。
と、喪服の仁美と背広に地味なネクタイ姿の三村、話しながら登場。

三村　そういうわけで女房にも話したんだ洗いざらい。
仁美　言わなくてもよかったのに。今までバレてないんだから、
三村　言わなきゃ新しいスタートが切れない感じがしたんだよ。過去を終わりにしてリセットするっていうか。
仁美　奥さんはどうした？
三村　ゲスゲスって散々罵って、最後にこう言いながら俺を三発ひっぱたいた。あたしのぶん。こどものぶん。あんたが傷つけた女のひとのぶん。
仁美　あたしのぶんも叩いてくれたんだ。
三村　思い知れってことだろう、俺がいかに最低な男だったか。でも良か

ったよ、墓友の人たちと知り合ったおかげだ。目の前に死ぬってことがあるじいさんばあさんがあんなに元気なんだから自分を見捨てるのは早いと思った。俺はあと二十年も三十年もあるんだから、まだ変れるはずだって。また小説も書き始めたんだ。

仁美　ひょっとしてあたしのこと？

三村　ああ、懺悔のつもりでね。

仁美　やめてよお互い様なんだから。あ、むしろあたしが奥さんに懺悔しに行く？

三村　やめろよ、蒸し返すなよ。

仁美　ハハ……あ、お母さんいたんだ。

邦子　声かけづらかったのよ、お話弾んでたから。

仁美　三村さん。去年ここで一度。

邦子　ええ、編集長さんね。

三村　えー、このたびはどうも。第一号の納骨式をぜひとも見学させていただきたいと思いまして。

邦子　それはどうもありがとうございます。祥文さんも喜んでらっしゃいますよ。

三村、自画像を見て、

三村　ああ、いいなあ。こういう枯れた年寄りになりたいなあ。

仁美　皆さんはまだ本堂でしょ？

邦子　うん、お茶飲んでる。

三村　ではちょっとご挨拶に……あ、その前にお母さんにも懺悔を、

仁美　いいわよ、早く行ってらっしゃいよ。

三村　あ、うん。

三村、本堂の方へ去る。

邦子　なに懺悔って？

仁美　ああ……実は付き合ってたのよ。不倫だったの。

邦子　……別れたの？

仁美　うん、あたしから言ったの。そしたらすぐ納得した。お互いずっとわかってたのよ。だからもうさっぱり。仕事の付き合いは続くと思うけど。

邦子　そう。とりあえずよかったわ。

仁美　あたし弱っちいのよ。一人で生きてくはずなのに、一人で生きてく強さがなかった。そこいくと墓友の人たちは強い。一人で生きて、一人でこの世とお別れする覚悟ができてるもん。ゆるやかにつながりながら。あたしも遙香も影響受けたよ。お母さんも強いよね。

邦子　強かないわよ。

仁美　強いよ。強すぎんのよ。だからお父さんのことも、ずーっと我慢して。

邦子　……。

仁美　その後、どうなの？ちょっとは仲良くなれた？

邦子　相変わらずよ。何もなかったみたい。

仁美　それがすごいよね、あれだけのことがあったのに。

邦子　昔っからそうよ。都合の悪いことはなかったことにする天才。でもね、歯ブラシ買ってきたのよ。

仁美　え？

邦子　そろそろ買わなきゃなあとは思ってたのよ。そしたら朝見たら新しいのが置いてあって。

仁美　お父さんが買ったんだ。

邦子　そう、しかも赤と青と2本。そんなこと初めてなのよ。

仁美　すごいじゃん、すごい前進だよお父さん。買った話、お父さんした？

邦子　しない。照れると思ったからあたしもしてない。

仁美　なによめんどくさいわねえ。

邦子　めんどくさいのよ、ずーっと。

仁美　でもすごいよ、その話。そうかあ、お父さんが歯ブラシ買ったかあ。

邦子　（ぐすん）

仁美　泣くことないじゃないの。

邦子　泣いてもいいよこの話は。今日何してた？

仁美　うちでゴロゴロしてたけど。

邦子　この会の話はしてなかった？

仁美　あたしは行くって言ったけど生返事。

邦子　そう。

仁美　何よ。

邦子　実はね、ゆうべお父さんのケータイにメールしたの。あたしは行くからお父さんも来たら？って。

仁美　この会に？

邦子　うん。だってお母さんのだいじな友達だし、墓友の人たちにも会え

るし、つまり、お母さんの気持ちに、お父さんが近付けるチャンスっていうか。

邦子　来ないわよ。

仁美　そうかなあ。その歯ブラシの話聞くと可能性はゼロではない気もするんだけど。

邦子　返事は来たの？

仁美　来ない。

邦子　でしょう？だいたいあの人、自分の喪服がどこにしまってあるかも知らないのよ。あたし出してこなかったもの。来れないわよ。

と、義明と照之登場。二人ともアーチストらしい洒落っ気のある葬儀の衣装。照之は小さめのスーツケースを引きずり、義明は旅行鞄を持っている。

義明　こんにちは。

仁美　あー、今着いた？

義明　うん、成田から直で。

邦子　ご苦労様ねえ、わざわざ遠いところを

照之　いえ当然です。僕はなにしろコーディネーターみたいなもんですから。

義明　僕はお母さんのご友人のお別れに。

照之　浩介さんの僧侶ぶりも楽しみだしね。

と、本堂のほうから浩介登場。作務衣を着て、額縁を拭くためのやわらかい布を持っている。

浩介　やあ来たかお二人。

義明・照之　こんにちは。

浩介　今日はよろしくね、ハッピーにいきたいね。（と言いながら自画像の額縁を形ばかり簡単に拭き、手を合わせる流れで）

義明　ああ、いい絵だねえ。

邦子　自画像なのよ。

浩介　ゴッホが好きだったのかな。あとピカソと赤塚不二夫も混じってる。

義明　ふざけてるようだけど、ちゃんと自分を見つめて描いてるよ。

浩介　（このあたりまでに手を合わせ終える）

照之　だけど浩介さん、早く着替えたほうがいいんじゃないすか、そろそろ時間でしょ？
浩介　いや、今日はこれでやるんだよ。
義明　作務衣でですか？
浩介　ああ、祥文さんの遺言でね、ともかく大袈裟で堅苦しいことはしないでくれって。経も読むな、僧衣も着るな。ねえ、お母さん。
邦子　この人らしいでしょう？最後まで飄々。
照之　Love&Peace だよね。
義明　へえ、それはまた楽しみ。
浩介　皆さん本堂にいるよ。お茶飲んでるよ。
照之　じゃあご挨拶に。
義明　僕はちょっと。
照之　持ってくよ。
義明　ありがとう。（と鞄を渡す）
浩介　もうしばらくお待ちください。
邦子・仁美　はい。

浩介、照之、本堂のほうへ退場。

邦子　おかえり。
義明　ただいま。桜きれいだね。
仁美　うん、ちょうど満開。
義明　祥文さんの穴は？
邦子　一番根元に近いとこよ。ちょっと盛り上がってる、
義明　ああ、あれか。毛虫がすごいとこだ。
邦子　それも祥文さんの遺言なのよ。女性は毛虫が苦手だろうから男の私が犠牲になりますって。
仁美　優しいわねえ。
義明　ジェントルマンだ。
邦子　あんまりみんなが褒めるから竹内さん悔しがってた。
仁美　ハハハ。
義明　ところで、お父さんは今日こないのかな。
邦子　え？
義明　いや、いい天気だし、散歩ついでに来ないかなあと思って。
仁美　……ひょっとしてあんたメールした？
義明　うん、きのうちょっと思いついて。オヤジにメールなんかしたこと

ないから緊張したけどね。僕も行くからお寺で会いませんかって……ねえさんも？

仁美　うん、あたしもきのう。

義明　そう。

邦子　二人ともありがとね。だけどさっき仁美にも言ったんだけど、

仁美　お母さんにはなんにも言ってないって。喪服の準備もしてないし。

義明　そう……。

と、美枝子と義和がやってくる。

美枝子　こんにちは。

邦子　あら。

仁美　にいさん忙しいんじゃなったの？

義和　美枝子にひっぱられてね。将来、私も墓友になるかもしれないって脅されてさ。

義明　あ、僕とテルもいいんじゃないかって話してたんですよ。一緒になりましょう。

義和　おいあおるなよ。

義明　ハハ。

美枝子　この桜の下なのね。

仁美　そう、あのへんだって。

美枝子　いいわね、墓石のないお墓も。ほんと自然に還る感じ。

義和　ところで、オヤジは来てないの？

邦子　どうして。

義和　いや、みんないるし、来てないのかなあと思ってさ。

美枝子　（義和を指し）ゆうべメールしたんですよ。

邦子・仁美・義明　え？

美枝子　僕らも行くから行きませんかって。

義和　それもこいつに尻叩かれてだよ。オヤジにメールなんて初めてだから文面堅くなっちゃってさ、「春爛漫の折、おかわりありませんか」から始まって。

仁美　あとは？

義和　まあ、なんとか誘い出す文句だよ。「寺には桜の木があるそうです」

義明　「お花見がてら来ませんか」

仁美　「ご用がなければそのあと家族で……。」

義和　おまえらもか。

仁美・義明　うん。
邦子　ありがとう。あなたたちも心配してくれたのね。
義和　心配というか、そうなればいいなと思ったんだよ。おふくろの気持ちがある。オヤジにはそれが理解できなかったとしても、それを理解する気持ちを示そうとするって言うか。
義明　そこだよね。
義和　夫婦なんて思ってることはバラバラなんだよ。うちもあれからずいぶん話したんだが、こいつまだわだかまっててさ。
美枝子　父と仲が良すぎるんですよ。永福町に引っ越してからは父の部屋に入りびたりで。
義和　ほら。
三人　ハハハ
義和　わだかまりは残る。もしあたしが父の娘じゃなかったらって言われた時は、二の句がつげなかった。
美枝子　でも、そこからもう一度、夫婦になればいいって話したんです。
仁美　うん。
義和　だからオヤジとお袋にも、そうなってほしいと思ってね。
邦子　うん。

と、栗原登場。葬儀には似合わない春らしいジャケット姿である。

栗原　こんちは。
仁美　あれ？栗原さん。
邦子　あら来てくれたの。
義明　律儀ですねえ、祥文さんと面識もないのに。さあ、どうぞ。
栗原　いやいや、その前に、なぜ俺が、こんな派手なジャケットを着てるかという、言い訳をさせてほしい。実はこれは去年の春、通信販売で買ったもので写真ではもっと色が地味だった。届いてからしまったと思ったんだが、送り返すのも面倒なので着ないで箪笥にしまっておいた。そこへ今日、吉野からうちに来いと電話があった。
邦子　あらいつよ。
栗原　邦ちゃんが出かけたあとだよ。で、俺が出かける支度をしてると、女房がこれを引っ張りだしてきてな、一度も着ないで勿体ないから来ていけという。吉野んち行くのに着てもしょうがないけど、ほかに来ていくとこもないから、着ていった。

義和　この話はどこに終着するんですか。
栗原　まあ待ってくれよ。で、行ったら吉野がももひき姿で待ち構えていたんだ。で、俺の顔を見るなり言うにはさ、一緒に探してくれって。
仁美　何を？
栗原　喪服。
五人　え？
栗原　邦子がいないからわからないと言うわけだ。で、家じゅう探して納戸の奥で見つけてさ、シャツとネクタイも探し当てて、一人じゃ照れくさいからお前も来いと言われて、なんだわからないうちに、こんなかっこでここにいる。
仁美　お父さんも来てるの？
栗原　うん。（門の方に向かって）吉野、みんないるぞ。

喪服姿の義男が現れる。

邦子　あなた……
義男　去年、せっかくうちの近くまで来てくれたのに、俺が断ってお会いできなかった。だから、お詫びとご挨拶に来た。
邦子　うん……。

と、本堂の方から陽子、佐和子、竹内、由利江、さらに遙香、剛、三村、照之、そして浩介が、ぞくぞくとやってくる。遙香は桜の花びらの入った二つの籠を、剛は楽譜を書いた十数枚の紙を持っている。

陽子　邦子さん、お待たせ。お喋りが終わらないのよ、お酒も入ってないのに。
佐和子　ハハ、盛り上がっちゃうのよ、祥文さんの思い出話は。
邦子　皆さん、うちの家族です。
家族以外の人々　（口々に「こんにちは」など）
仁美・義明　ご無沙汰してます。
邦子　長男と嫁です。
義和　母がいつもお世話になってます。
家族以外の人々　（口々に「こちらこそ」「こんにちは」など）
邦子　お友達の栗原さんです。
栗原　俺はいいよ・・今日はお邪魔します。何故このような格好で・・・

家族以外の人々　（口々に「こんにちは」など）
邦子　そして、主人です。
義男　吉野です。いつぞやはたいへんご無礼をいたしました。まずはお詫び申し上げます。（礼）
墓友たち　……。（礼）
義男　邦子がいつもお世話になっております。その御礼を申し上げます。（礼）
墓友たち　……。（礼）

邦子が、義男の背後からこっそり上着の裾をつまむ。

義男　なんだよ。

邦子、義男の上着の裾についた、洗濯屋のタグを取る。

義男　……。

皆、くすくすと笑う。

浩介　では、そろそろ始めてよろしいでしょうか。
皆　（口々に同意の声）
竹内　遺影は俺が持つよ。
陽子　そうね、一番仲良しだったから。
由利江　いい日差しになりましたわね。
佐和子　うん、入学式にはもってこいの日差しね。祥文さんは天国への入学式。劣等生でしょうね。
由利江　アハハ。

皆、桜の木に向かって並ぶ。
と、喪服の聖子が登場。

聖子　すみません、遅くなりました。
陽子　あ、聖子ちゃん、来てくれたの？
聖子　大切な常連さんでしたから。遙香さんにも誘って貰ったんで。
仁美　え、剛君取り合った仲じゃない。
遙香　いろいろあったけどまた付き合うことになりましたって、仁義を

仁美　切りに行ってから仲良くなったのよ。剛君はいやそうな顔するけどつっぱねてるの。あんたは関係ない。あたしの友達って言って。

三村　遙香、あんた強くなったねえ。

剛　女は強いぞ、開き直ると。お互い気をつけよう。

遙香　はい。

聖子　聖子ちゃん、ここ。挟んじゃおう。

聖子　はい。

遥香と聖子、剛を挟む位置に並ぶ。剛はきまり悪そう。皆、それを見てくすくす笑う。

浩介　では、これより岡添祥文さんの納骨式を執り行います。えー、と言っても、納骨のほうは、さきほど墓友の皆さんにお手伝いいただきましてすでに済ませております。えー、そこの根元の、ちょっと盛り上がってるとこですな。いま祥文さんはあそこにおります。今んとこ一人ぼっちです。早く誰か隣に行ってあげてください。

墓友　（口々に「ハハ」「やだあ」「竹内さん」「いや俺、三番目ぐらいが」など）

浩介　えー、遺言により、格式ばったことは一切なしでございます。まずは墓友の皆さんから、一言づつ、声をかけてあげてください。

佐和子　じゃ、あたしから。祥文さん。栄えある旅立ち第一号、おめでとうございます。あなたがいてくれたおかげで、私たちはとても楽しかった。孤独や死や、しめっぽくなりがちな話もあなたのおかげで、露天風呂につかってるような気分で話すことができました。ありがとう、また、近いうちに。

陽子　祥文さん。あなたはとっても謎めいていて、私たちは勝手な噂話をしていたけど、入院してから、いろんなことを話してくれましたね。改めて、それぞれの人生のことを想いました。あたしにもいろいろあったし、祥文さんにもいろいろあった。それが最後の最後に、フアミレスのテーブルで混じり合った。感慨深いです。お会いできてよかったです。ありがとうございました。バイバイ。

由利江　いつも暗い顔をして、暗い話をする私を、祥文さんはニコニコ笑って受け止めてくださいました。そのことが救いとなり、いま私は、朗読が得意な女になりました。数々の、お金だけ持ってる男たちと付き合ってまいりました。祥文さんは、お金はあまりお持ちではなかったようですが、もっと早くお会いできていればと思います。ゆ

っくりお休みくださいませ。

邦子　お墓のことで悩んでいる時、祥文さんはニコニコ笑って言ってくださいました。あんたの好きにしなさいよ。いま思うことでいいんだ。明日は変ってもいいんだ。それが、皆さんのお仲間になる後押しをしてくれたように思います。未来に縛られてはいけません。今思うことを行動にうつしなさい。祥文さんはそう言ってくださったように思います。お墓のことを考えることで、私が、私として生きるということを考え始めたように思います。ありがとうございました。

竹内　祥文さん、男は俺一人になっちゃった。つくづく思うんだけど、俺と祥文さんみたいな、だらしねえ男だから仲間に入れて貰えたんじゃねえかなあ。たいていの男は年取ると威張って自慢話ばっかりするんだよ。飲み屋に行ってもそういう奴が多いよ。立派だった人はそうしないと居場所がないような気がするんだろう。俺たちは立派じゃなかったから威張ることもなかった。ざっくばらんに話ができた。それが良かった。年取ると、俺たちみたいなほうがモテんじゃないかね？

皆　（笑う）

竹内　まあこの先も立派にならねえように気を付けるよ。ここには毎月、墓参りにくるつもりだ。むこうのことをいろいろ教えてください。嘘はつかねえでな。

皆　（笑う）

竹内　じゃあ。

浩介　楽しいご挨拶、ありがとうございました。ではここで歌を歌いたいと思います。

遙香　剛くん。

剛　うん。

剛、楽譜を書いた紙を皆に配る。

浩介　えー、これも遺言によりまして、お経は読むなということでございます。ボウズに対して失礼な話だと思うのですがいたしかたありません。代わりに今お配りしているメロディをハミングしてくれということでございます。それをバックにボウズが歌詞を読め、ということでございますので、そのような段取りにさせていただきたいと思います。花びらが回ってまいりますので、歌いながら撒い

ちゃってください。

遙香と聖子が、籠を持って皆に一掴みづつの花びらを取らせる流れで。

浩介　では、墓友のみなさんは前の方へ。よろしいでしょうか？楽譜の読めない方は適当に隣の方に合わせててください。では、まいります。

照之　Here we go!!

皆、楽譜を見ながらハミング。歌いながら、花びらを撒く。

歌　ＡＨ・・ＡＨ・・（伴奏コード＝和音の一音づつを歌う）

浩介　さあ　天国なんてないと想像してみてよ
やってみたら簡単なことだよ
ついでに地獄もないと思って
僕らの上にはただ空があるだけさ　だよね？
そんなこと言ったら　君は僕を夢想家というかもしれない
だけど　悪いけど僕は一人じゃない
そのうち君も僕らの仲間になって　世界が一つになるといいなあ
…

照之　ＬＯＶＥ＆ＰＥＡＣＥ！

歌、終わる。音楽。皆、桜を見る。式は終わった。
皆、桜に向かってゆっくりと一礼。そして浩介、竹内、佐和子、陽子、由利江、遙香、聖子、剛、誘い合いながら三村と栗原、本堂の方へ去る。スローモーションのように。美しく。

仁美　そして、式は終わった。少しだけ名残を惜しんだ後、人々は本堂へ向かう。栗原さんは持ち前の明るさで、あっという間にとけこんだ。やがて本堂からはお酒の入った陽気な声が聞こえてくるだろう。境内には私たち家族とテル君が残った。

義明、照之、義和、美枝子、邦子、ベンチに座る。

みんながベンチに座るのに、父だけが離れて立っている。

仁美　面白かったね。

義明　面白かった。

照之　こういうのもなかなかいいもんだなあ。

義和　桜を撒くのもよかったわ。

美枝子　うん。

義和　お父さん、座ったら？

邦子　……邦子。

義男　はい？

邦子　ありがとう。

義男　……。

皆　……うん。

邦子　その一言は唐突だった。だがその一言でもう良かった。私たちは

仁美　新しい家族になるだろう。そして七人で、桜を見た。

七人が桜を見る。お互いがお互いを感じながら。

優しい春風に乗って花びらが舞う。暗転。

（了）